

# ヴェトナム和平協定とラオス、1969-1973

## —キッシンジャー＝レ・ドク・ト交渉を中心に—

水 本 義 彦

### はじめに

近年、ニクソン（Richard Nixon）政権期のヴェトナム和平交渉の過程を米国政府一次史料に依拠して分析した研究が数多く発表されている。代表的な研究として、キンボール（Jeffrey Kimball）、バーマン（Larry Berman）、アセリン（Pierre Asselin）、ハニマキ（Jussi Hanhimaki）などの研究が挙げられる<sup>1)</sup>。これらの研究によって、大統領ニクソンと安全保障問題担当補佐官ヘンリー・キッシンジャー（Henry A. Kissinger）によるヴェトナム和平戦略の立案過程やキッシンジャーと北ヴェトナム代表レ・ドク・ト（Le Duc Tho）によるパリでの秘密交渉の実態がずいぶん明らかになった。

これまでの研究は、アメリカと北ヴェトナムとの2国間交渉の枠組みや、ニクソンとキッシンジャーによる対ソ連・中国「三角外交」との関連においてヴェトナム和平交渉を分析してきた。それに対し本稿は、ヴェトナム戦争と一体化した戦場となった他のインドシナ諸国との地域的關係を重視したヴェトナム和平の分析を試みる。

元来ヴェトナム戦争は、隣国のラオスやカンボジアを含んだインドシナ全域での戦争の性質を持ち、とくにニクソン政権に入ると、同政権による戦線拡大によってその様相は色濃くなった。したがって、ヴェトナム戦争が第2次インドシナ戦争の性格を有していたとすると、その和平プロセスの分析においても、他のインドシナ諸国の情勢を加味した、より広範な視座から

の考察が求められる<sup>2)</sup>。

本稿はその手始めとして、ヴェトナム和平におけるラオス要因の重要性を指摘する。1960年代初頭以来、ラオスはその領内に北ヴェトナムによる南ヴェトナムへの浸透路、いわゆる「ホー・チ・ミン・ルート」を抱えることによってヴェトナムと一体化した戦場となっていた。第1節で見ると、ジョンソン（Lyndon B. Johnson）政権の誕生以来、アメリカ政府はラオスで北ヴェトナム軍との「秘密の戦争」を本格化させ、ニクソン政権期に入るとラオスはインドシナ諸国で米軍による最大の空爆対象となったほか、1971年春には米軍と南ヴェトナム軍共同の地上侵攻作戦も実施されて、ヴェトナム戦争と完全に一体化した戦場となっていく。

こうした状況において、ニクソン政権はインドシナ戦争の包括的解決によるヴェトナム和平を構想し、和平の成否を左右する最も重要な要因のひとつとしてラオスの紛争解決に取り組んだのである。第4節で見ると、実はキッシンジャーがパリでのレ・ドク・トとの秘密交渉で最も時間をかけて解決しようとした問題のひとつが、北ヴェトナム軍のラオス撤退と同軍による南ヴェトナムへの浸透停止の確約を取り付けラオスで和平を達成することであった。しかし、キッシンジャーはラオス和平の実現に失敗し、これがやがてヴェトナム和平を切り崩していくことにもなる。第5節では、これまであまり注目されてこなかったヴェトナム和平協定締結後のキッシンジャーとレ・ドク・トの交渉に注目し、そこでのラオス問題をめぐる対立が、

ラオスの和平のみならず、ヴェトナム和平の最終的な破綻をもたらす一因となったことを指摘したい。

本来、ヴェトナム和平を考察するにはラオスとともにカンボジアやタイの情勢も考慮しなければならないが<sup>3)</sup>、ここではヴェトナム和平とラオス情勢の関連、とりわけヴェトナム和平協定の最大の問題点となった北ヴェトナム軍の残留問題とラオス情勢の関連に議論を限定したい。ヴェトナム和平をインドシナ全域の国際秩序の再編過程として論じるには、カンボジアとタイの情勢を含んだより多角的な考察が必要であるが、それは今後の研究課題とする。

### 1. ラオスの「秘密の戦争」とヴェトナム戦争

ニクソン政権期のヴェトナム和平交渉の考察に入る前に、1960年代のラオス情勢とヴェトナム戦争との関連について要点を述べておきたい。

1950年代後半以来、ラオス国内では、いわゆる右派（親米勢力）、中立派、左派（共産主義勢力）3派間で権力闘争が繰り返され、60年代に入ると本格的な内戦状態に陥った。インドシナ半島の共産化を恐れた米政権は、アイゼンハワー（Dwight D. Eisenhower）政権以来、右派に経済的・軍事的支援を供給して同派の権力奪取に挺入れし、北ヴェトナムはじめ、ソ連、中国の共産主義諸国の支援を得た左派パテト・ラオ（Pathet Lao）の勢力伸張を封じ込めてきた<sup>4)</sup>。

アイゼンハワー政権のあとを継いだケネディ（John F. Kennedy）政権は、政権内部に激しい意見対立を抱えつつも、米ソ対決の焦点と化したラオスでの国際内戦の解決を、関係14カ国によるジュネーヴ会議に委ね、1962年7月、ラオスの国際的中立に関する協定（ジュネーヴ協定）が締結された。同協定によってラオス国内に駐留する外国軍の撤退が決まり、ラオスは3派による連合政府の樹立によって和平を達成するかに思われた<sup>5)</sup>。

ところが、ジュネーヴ協定は締結から数年後には破綻し、ラオスの国際的中立は「見せ掛け」

に過ぎなくなる<sup>6)</sup>。ラオスの3派は連合政府の樹立に失敗し、1964年には、首相スヴァンナ・プーマ（Souvanna Phouma）を擁する中立派と右派の連合軍とパテト・ラオの間で戦闘が再燃した。また、隣国南ヴェトナム内でのサイゴン政府と共産主義勢力解放民族戦線（以下、解放戦線）との戦闘が激化するにつれ、ラオスはその地勢的・戦略的重要性から、北ヴェトナムとアメリカによってヴェトナムと一体化した戦場と見なされ、ヴェトナム戦争に巻き込まれていく。北ヴェトナムとアメリカはジュネーヴ協定に違反してラオスへの軍事介入を拡大し、ジョンソン政権の北爆開始によってヴェトナム戦争が1965年春に本格化すると、ラオスを巡る両国の対立も熾烈化していった。

ラオスでのアメリカと北ヴェトナムの対立は、次の2つの地域を巡って繰り返された<sup>7)</sup>。ひとつは、ラオス北東部に位置するジャール平原である。ジャール平原は首都ヴィエンチャンと王都ルアン普拉バンというラオス政治の2大中心地の間に位置し、ジャール平原の支配はラオスの命運を左右する重要な問題であっただけでなく、北ヴェトナムにとっては自国領土に近い同地域がアメリカの支配下に落ちて、自らに対する攻撃拠点、発進基地と化するのを防がねばならなかった。よって、ハノイは軍を派兵して同盟軍パテト・ラオを支援し、アメリカが支援するラオス王国政府軍へ対抗した。

もうひとつの重要な地域は、ラオス南部のパンハンドル地域であった。60年代、南ヴェトナムで内戦が激化するにつれ、北ヴェトナムはパンハンドル地域に南ヴェトナムへの浸透路、いわゆる「ホー・チ・ミン・ルート」を建設していった。ある推計によれば、1966年から1971年にかけて、北ヴェトナム軍はホー・チ・ミン・ルートを経由して、63万人の兵士、10万トンの食糧、40万の武器、6億発の弾薬を南ヴェトナムに搬入したとされる<sup>8)</sup>。

さて、ジョンソン政権は、ラオスでの戦争にどのように対応していたのか。アメリカの対応

は、大別して2つに分けられる。第1は、米海空軍によるラオス爆撃作戦である。ジョンソン政権は1964年末以来、ラオス北東部の北ヴェトナムとの国境地帯においては「バレル・ロール (Barrel Roll)」作戦を、南部では「スティール・タイガー (Steel Tiger)」作戦による爆撃を実施していたが、その規模は60年代後半に年々拡大していった。68年10月にジョンソンは北爆を全面停止したものの、次節で改めて見るように、ラオスはそれ以後米軍による最大の爆撃対象となっていく。

第2に、ジョンソン政権は地上での米軍の戦闘を回避すべく、ラオス王国軍や山岳民族部隊、またタイの特殊部隊を支援してその任務に当たらせた。アイゼンハワー政権末期以来、歴代アメリカ政権はラオス王国軍への支援とともに、王国軍第2軍管区司令官ヴァン・パオ (Vang Pao) 率いる山岳民族のモン (Hmong) 族に軍事教練や武器・弾薬、食糧を供給して北ヴェトナム＝パテト・ラオ共産軍と戦わせた<sup>9)</sup>。

ニクソン政権が誕生する1960年代末までに、モン族部隊は約4万にまで拡大していた。このモン族のゲリラ作戦の訓練を指揮したのは、米中央情報局 (CIA) であった。ジュネーヴ協定によって外国軍のラオス駐留が禁止されていたため、CIAが米国国際開発援助庁 (USAID) や米広報文化交流局と連携しながらラオスでの共産軍との非公然の戦争を指揮したのである。さらに、このCIAによる戦争には、60年代初めからタイ政府が深く関与していた。CIAの技術指導・資金提供の下、タイは警察空中増強部隊の精鋭をラオスに送り、モン族部隊の育成に力を発揮したほか、タイ領内の基地でラオス人パイロットの育成なども手がけていた。また、民間航空会社エア・アメリカ (Air America) 社によるモン族拠点ロンチェンへの支援輸送もタイ領内の基地を発進地としていたのであり、CIAはタイを拠点にラオスでのゲリラ戦を指揮していたのだ<sup>10)</sup>。

こうしたラオスでのアメリカの戦争は、しば

しば「秘密の戦争」と呼ばれる。ジョンソン政権は、空爆作戦に重点をおいて国際監視の目にさらされる地上戦への直接関与を避け、ラオスの現地勢力やタイの特殊部隊を利用する非公然戦争に打って出たのである。解放戦線のゲリラ戦にアメリカが苦しんだヴェトナム戦争とは対照的に、ラオスでは北ヴェトナム＝パテト・ラオ共産軍が通常戦争を戦い、アメリカはモン族を支援してゲリラ戦を展開したのだ<sup>11)</sup>。ラオスでの戦争が「秘密の戦争」と呼ばれるのも、歴代アメリカ政権の介入が非公然の形態をとったことによる。ヴェトナムへの本格的介入とともに、ジョンソン政権は議会や国民に説明することなく、このラオスでの戦争を拡大していったのであった。

## 2. ニクソン政権のヴェトナムと平和戦略とラオス

それでは、ニクソン政権 (1969年1月発足) のヴェトナムと平和戦略において、ラオスはどのような位置付け、意味をもっていたのであろうか。本節では、ニクソンがヴェトナムと平和戦略の2本柱として掲げた「ヴェトナム化 (Vietnamization)」と平和交渉におけるラオスの重要性を明らかにしたい。

### (1) 「ヴェトナム化」政策とラオス

ニクソン政権期に入ると、ヴェトナム戦争は第2次インドシナ戦争の様相が濃くなるが、それは主にカンボジア、ラオスへの戦線拡大によってもたらされた。カンボジア、ラオスへの侵攻作戦を通じた戦線の拡大は、ニクソン政権がヴェトナムと平和戦略の主要な柱として採用した「ヴェトナム化」政策の帰結であった。ヴェトナム化政策の要諦は、南ヴェトナム軍の軍事的能力を増強して共産主義者との闘争で自らの生存を確保させつつ、米軍のインドシナからの名誉ある撤退を実現することにあつた。ニクソン政権は、南ヴェトナムから段階的に軍を撤退させる一方で、カンボジア、ラオスへの爆撃強化、

表1 インドシナでの米軍の爆撃

	Nov 1968 - Jul 1970		Aug 1970 - Mar 1972		Apr 1972 - Feb 1973		Total	
	Tons	% of Total	Tons	% of Total	Tons	% of Total	Tons	% of Total
<b>S.Vietnam</b>	<b>1,044,024</b>	<b>53.0</b>	<b>203,941</b>	<b>20.9</b>	<b>541,062</b>	<b>58.5</b>	<b>1,789,027</b>	<b>46.2</b>
<b>N.Vietnam</b>	<b>1,559</b>	<b>0.1</b>	<b>4,989</b>	<b>0.5</b>	<b>230,588</b>	<b>24.9</b>	<b>237,136</b>	<b>6.1</b>
<b>Cambodia</b>	<b>21,384</b>	<b>1.1</b>	<b>76,856</b>	<b>7.9</b>	<b>45,305</b>	<b>4.9</b>	<b>143,545</b>	<b>3.7</b>
<b>Laos</b>	<b>902,223</b>	<b>45.8</b>	<b>688,935</b>	<b>70.7</b>	<b>108,089</b>	<b>11.7</b>	<b>1,699,247</b>	<b>43.9</b>
<b>Total</b>	<b>1,969,190</b>		<b>974,721</b>		<b>925,044</b>		<b>3,868,955</b>	

Perry Lamy, 'Barrel Roll, 1968-73: An Air Campaign in Support of National Policy'

Air War College University, May 1995, p.55

侵攻作戦を通じて北ヴェトナム軍を弱体化させ、南ヴェトナム軍増強の時間を稼いでいった。換言すれば、ヴェトナム化政策を推進して名誉ある撤退を実現するために<sup>12)</sup>、ニクソン政権は隣国カンボジア、ラオスへ戦線を拡大するという危うい政策に踏み込んだのである。

ニクソン政権による戦線拡大としては、70年4月末に実施されたカンボジア侵攻が有名であるが<sup>13)</sup>、表1に見るように、第1次ニクソン政権期全体を通して、ラオスは南ヴェトナム同様、米軍の最大の空爆対象であり、その総爆弾投下量は、北ヴェトナム、カンボジアへの投下量と桁外れのものであった。第1節で見たように、ジョンソン政権期からラオスはすでにヴェトナムと一体化した戦線となっていたが、ニクソン政権に入ってラオスへの空爆は熾烈を極めたのである。

また、1968年初頭から北ヴェトナム軍はラオス戦線に部隊を増派し、これによってモン族部隊の死傷者が増加すると、ニクソンは70年2月にラオス北部で初めてB-52による大量爆撃を実施したほか、費用負担と引き換えにタイ政府に部隊の派遣を要請した。同月、ヴァン・パオの戦略拠点ロンチェンが共産軍によって奪取される危険が生じると、それ以降、タイ政府は徐々に「義勇軍」の派遣を進め、72年末の最大時には、2万3000人のタイ兵士がラオスで共産軍と

戦っていた。こうしてニクソン政権は、タイ軍による代理戦争の形でラオスへの戦線拡大を行っていたのである<sup>14)</sup>。

## (2) ヴェトナム和平交渉—インドシナの包括的和平

ニクソンのヴェトナム和平戦略のひとつの柱がヴェトナム化政策による南ヴェトナム軍の増強と米軍の撤退であったとすると、それを補完するもうひとつの柱が、北ヴェトナム代表との和平交渉であった。

和平交渉を最終的な妥結に導いたのは、表向きの4者会談とは別に、69年8月から73年1月にかけて断続的に開催されたアメリカと北ヴェトナムの代表によるパリでの秘密交渉であった。アメリカ側の代表はキッシンジャーが務め、北ヴェトナム側は当初スアン・トゥイ (Xuan Thuy) が、70年2月以降はレ・ドク・トが中心となって交渉を指揮した。交渉の行き詰まりに業を煮やしたニクソンがその裏チャンネルの交渉を72年1月に暴露するまで、秘密交渉はキッシンジャーの独壇場であり、国務長官のウィリアム・ロジャーズ (William P. Rogers) と国防長官メルヴィン・レアード (Melvin Laird) も完全に蚊帳の外に置かれていた。

キッシンジャーと北ヴェトナム代表との交渉が本格的な進展を見せるようになるのは、72年

の秋になってからのことであった。それ以前、両者の間には、主に2つの問題をめぐる根本的対立があった<sup>15)</sup>。ひとつは、南ヴェトナム国内問題についてである。北ヴェトナム側は、ティエウの政権からの追放と、解放戦線を糾合した連合政府の樹立を和平の必須条件として要求した。南ヴェトナム政府の倒壊を求めるハノイの要求をアメリカが受け入れるはずがなく、キッシンジャーはアメリカ政府の基本方針として軍事問題と政治問題を区別し、このパリでの和平交渉は軍事問題の協議に限定すべきとの立場を貫いた。連合政府樹立等の国内政治問題は、和平協定締結後にヴェトナム人同士で決着を図るべきとして問題の先送りをねらった。

もうひとつは、南ヴェトナムからの外国軍の撤退に関する問題である。北ヴェトナム側は、米軍の全面的かつ「一方的な撤退」に固執する一方で、キッシンジャーは北ヴェトナム軍の撤退も含む両国の「相互撤退」を主張した。ハノイは、南ヴェトナム内の北ヴェトナム軍の存在を否定し続けたが、彼らの理屈によれば、そもそも南北ヴェトナムは別々の主権国家ではなく、それゆえ北出身の兵士たちは「外国軍」の範疇に属するものではなかったのである。

本稿の問題関心との関連において重要なことは、ニクソンが米軍の戦闘部隊の撤退条件として、単に南ヴェトナムからだけでなく、ラオスとカンボジアからの北ヴェトナム軍の撤退も課していたことである<sup>16)</sup>。この原則は、69年4月に国家安全保障決定覚書第9号(NSDM9)で確認されて以来<sup>17)</sup>、和平交渉の基本方針として堅持されていく原則である。同年5月14日、ニクソンはヴェトナム和平のための8項目提案を公表し、行程表に沿った米軍と北ヴェトナム軍の相互同時撤退を強調し、米軍の一方的な撤退や、アメリカの「敗北を偽装」するような条件での北ヴェトナムとの交渉に応じるつもりはないと決意を語った。さらに、この演説で大統領は、ラオス、カンボジアからの北ヴェトナム軍の撤退を米軍のインドシナからの撤退とヴェト

ナム和平の必須条件に挙げた。南ヴェトナムからの相互撤退だけでは十分ではなかったのである。北ヴェトナム軍の「聖域」を抱えるラオスとカンボジアが「新たな戦争拠点」となるのでは、ヴェトナム戦争の根本的な解決にはまったくならないからであった<sup>18)</sup>。

グエン・ヴァン・ティエウ(Nguyen Van Thieu)南ヴェトナム大統領も同じ考えであった。ニクソンの8項目に先立って発表した南ヴェトナム政府の6項目提案においてティエウは、南ヴェトナムからの撤退とともに、ラオス、カンボジアからの北ヴェトナム軍の撤退を和平の条件に挙げていた<sup>19)</sup>。7月30日、サイゴンを訪れたニクソンが、北ヴェトナム軍が撤退したらサイゴン政府は解放戦線に対処できるかと問うと、ティエウは、「ええ、対処できるでしょう。ただし、北ヴェトナムがラオスとカンボジアに居座るようであれば、恒久平和など想像できません」と答えた<sup>20)</sup>。要するにティエウは、ヴェトナム和平はラオス、カンボジアからの北ヴェトナム軍の撤退と両国での治安回復、国民和解を含めたインドシナ問題の包括的解決によって初めて可能になると訴えたのである。南ヴェトナム政府にとって、ヴェトナム戦争は国内での解放戦線との戦いだけでなく、ラオス、カンボジアに潜伏する北ヴェトナム軍との戦争でもあって、その意味において常にインドシナ全域での戦いだったのである。しかし、72年秋になるまで、北ヴェトナム代表団はラオス、カンボジア内の北ヴェトナム軍の存在を正式に認めず、ヴェトナム和平交渉から両国の問題を切り離す戦術をとり続けた。

### (3) ヴェトナム化と和平交渉の齟齬

本来、ヴェトナム化と和平交渉は相互に補完すべきものであったが、実際にはこの2つの間に齟齬が生じていた。

第1に、ヴェトナム化を推進するためのラオス、カンボジアへの戦線拡大は、インドシナ戦争の包括的解決という外交交渉の課題実現をよ

り困難にした。ニクソンは相互撤退の原則を掲げながらも、国内世論の圧力に押されて、事実上南ヴェトナムからの一方的な撤退の発表を繰り返していた。当初、ニクソンは米軍の撤退計画は、南ヴェトナム軍の増強度、和平交渉の進展度、敵軍の活動レベルの3つの基準に照らして決定するものと公言していた<sup>21)</sup>。にもかかわらず、69年6月のティエウとのミッドウェー首脳会談時に発表した2万5000人の撤退を皮切りに、69年9月16日には同年12月15日までの6万人の撤退を発表し、また18日の国連演説で、南ヴェトナムからの最終的な「全面撤退」の意思を明らかにした。さらに、70年4月には、翌年春までの15万人の撤退も公約したのである。

米軍の撤退速度と南ヴェトナム軍増強の不均衡を、結局ニクソンはラオス、カンボジアへの戦線拡大、両国への爆撃強化で部分的に是正したのだった。しかし、ラオスとカンボジアへの空爆・侵攻作戦は一時的に北ヴェトナム軍に損害を与えたものの、中長期的には、両国での同軍のプレゼンスを拡大させる逆効果をもたらしただけでなく、和平交渉で北ヴェトナム代表団の態度を硬化させる要因ともなった。70年3月と4月にキッシンジャーと会談したレ・ドク・トは、ラオスでの爆撃強化に言及して、「インドシナの戦争は今や一つになった」と語った<sup>22)</sup>。ニクソン政権は、「前例のない激しさで航空戦を強化し、(ラオス)北部に圧力をかけて南ヴェトナムの戦線と一体化させようとしている」。ハノイの指導者にとって、アメリカのヴェトナム化政策は、形を変えたインドシナ全域への戦争拡大策であった。ラオスへのタイ義勇軍の導入は、アジア人をもってアジア人と戦わせるヴェトナム化政策の新たな展開であった。「貴殿が戦争を拡大し、激化させるかぎり、貴殿は敗北に直面することになるだろう」<sup>23)</sup>。レ・ドク・トはヴェトナムと、ラオス、カンボジアでの3つの紛争に「明らかな関連」を見出していたが、ラオスとカンボジアに関してアメリカ側と「交渉する用意をまったく示さなかった」<sup>24)</sup>。こうし

て、戦線拡大に対する北ヴェトナムの反発によって<sup>25)</sup>、北ヴェトナム軍の撤退を前提とするインドシナ戦争の包括的解決は一段と困難になったのである。

第2に、ラオス、カンボジアへの戦線拡大は、ニクソン政権のヴェトナム政策に対する世論・議会の支持を著しく低下させることになり、結果、北ヴェトナムとの秘密協議におけるアメリカのバーゲニング・パワーを低下させることになった。1969年10月、スチュアート・サイミントン(Stuart Symington)を委員長とする安全保障協定と対外関与に関する特別小委員会の非公開公聴会によって、ラオスでの「秘密の戦争」への歴代政権の関与が暴かれることになった。国務・国防両省に加え、CIAやUSAIDの関係者も証言を求められ、翌年4月、その証言記録が一般公開されるにつれ、メディア、世論の政権批判が高まっていった。サイミントン委員会の調査によって、ジョンソン、ニクソン両政権が議会の承認なきラオスでの戦争にアメリカを長い間巻きこんでいることが明らかになり、ラオスへの関与が第二のヴェトナム介入となる懸念を高めた。これによって、議会による行政府の戦争権限の規制を求める動きが活発化し、70年12月には、ラオスとカンボジアでの地上作戦に軍事予算の使用を禁止する、「クーパー＝チャーチ修正条項(Cooper-Church amendment)」が議会上下両院を通過し、翌年1月に発効した<sup>26)</sup>。クーパー＝チャーチ修正は、73年11月の戦争権限法の成立にいたる議会の行政府に対する統制強化の第一歩となり<sup>27)</sup>、以後、ニクソン政権は議会による数々の反戦法案への対応に苦慮することになる。戦線拡大を通じたヴェトナム化という、一般世論・議会の支持の取り付けが困難なニクソン政権の和平戦略は、ラオスでの秘密の戦争が白日の下にさらさせることによって大きな綻びを見せることになったのである。

### 3. 方針転換

#### (1) 現状凍結停戦

前節で見たように、事実上一方的な撤兵を繰り返し、パリ交渉でのバーゲニング・パワーの低下に直面したニクソン政権は、70年秋から71年夏にかけて和平戦略の軌道修正をはかっている。

70年10月7日、ニクソンは「インドシナ全域における現状凍結停戦」を目玉とする新たな和平提案を国民に発表した。北ヴェトナムとの交渉が停滞する中、米軍だけが一方的な撤退を続けるリスクを回避するため、まず国際監視下でインドシナ全域での停戦を確立し、その後、インドシナ諸国の諸問題を討議する国際会議を開催するという計画であった。さらに大統領は、米軍の全面撤退の行程表を北ヴェトナムと協議する用意をも明らかにした<sup>28)</sup>。

この新提案には、注目すべき点が2点ある。ひとつは、ニクソンがインドシナ問題の包括的解決という従来の方針を堅持していることである。ヴェトナム、ラオス、カンボジア3国での現状凍結停戦だけでなく、3国の問題を一括して国際会議で議論することを新たに提案したのである。「停戦はヴェトナムだけでなく、インドシナ全域での戦いを包摂するものでなければなりません。この地域の紛争は、密接に関係しています。合衆国は戦争の拡大を求めたことは1度もありません。我々が強く求めるのは、平和の拡大なのです」。ニクソンはこう語って、「一体化」したインドシナ戦争においては、その部分に個別に対処するのでは平和を実現できないと訴えて、ラオス、カンボジア問題の解決をヴェトナム和平と関連づけたのだった<sup>29)</sup>。

しかし第2に、現状凍結停戦を訴える一方で、ニクソンは従来からの相互撤退原則への言及を避けて、交渉方針の転換を暗示した。ニクソンは米軍の全面撤退に応じる構えを見せた一方で、北ヴェトナム軍の撤退に関しては何の言及も行わなかった。ニクソンとキッシンジャーはこの後何度か相互撤退を求めていく姿勢を示しはし

たものの、キンボールが指摘するように、現状凍結停戦の提案は事実上相互撤退の原則に取って代わるものであった<sup>30)</sup>。

#### (2) 相互撤退原則の放棄

この相互撤退原則の放棄が明らかになったのは、71年5月31日のキッシンジャー＝スアン・トゥイ会談においてであった。このような重要な原則を、なぜアメリカ側は放棄したのか。実は、その主な要因のひとつが、この会談の直前に敢行された南ヴェトナム軍と米軍のラオス共同侵攻作戦ラムソン719の失敗だった。

皮肉なことに、先述のカンボジア侵攻作戦は、北ヴェトナム軍によるホー・チ・ミン・ルートの使用拡大をもたらし、ラオス領内の北ヴェトナム軍を増加させることになった<sup>31)</sup>。例えば、米政府のある推計によると、70年末の時点では、ひと月に約6000人の割合で北ヴェトナム軍の戦闘部隊がホー・チ・ミン・ルートを経由して南ヴェトナムに浸透していた<sup>32)</sup>。

そこでニクソンは、軍指導者との協議の結果、ラオス南部にある北ヴェトナム軍の戦略拠点チュボンに対する南ヴェトナム軍主導の侵攻作戦を71年1月中旬に決断する。クーパー＝チャーチ修正によって、ラオスへの地上戦闘部隊の派遣を禁じられた米軍の活動は、南ヴェトナム軍への航空支援に制限され、ラムソン719は南ヴェトナム軍の増強具合、すなわちヴェトナム化政策の進展度を試す意味合いも帯びていた<sup>33)</sup>。ニクソンは、新たな侵攻作戦への世論の批判をかわすべく、ラムソン719の目的は戦争の拡大にあるのではなく、米兵の命を救い、米軍の持続的撤退を可能にするヴェトナム化計画の促進にあると説得を試みた。「ヴェトナムにはその隣国に平和が生じるまで永続的な平和は訪れない」、それに、「もしハノイがラオス、カンボジアの支配を獲得したら、両国にいる14万以上の大規模共産軍が南ヴェトナムでの戦闘に解き放たれることになる」と語って、ハノイのインドシナ作戦の「中枢」地点であるラオス南部で

の軍事作戦に理解を求めた<sup>34)</sup>。

2月8日に始まったラムソン719は、3月末、南ヴェトナム軍の敗走で幕を閉じる。ニクソンは回顧録で、ラムソン719は軍事的には「成功」を収めたと抗弁しつつも、「世論対策の面では大失敗だった」ことを認めている<sup>35)</sup>。ラムソン719以後、世論の戦争支持は激減した。4月半ば以降、ワシントンで大規模反戦運動が繰り広げられ、23日には700人のヴェトナム復員兵が議会議事堂に集結して戦争の勲章を投げ捨て抗議の意を表わす事件まで生じた。5月3日付の『ワシントン・ポスト』紙によれば、このラオス侵攻作戦の失敗を引き金に「米世論の流れは今やインドシナ反戦へと決定的に変わった」のであった<sup>36)</sup>。

ニクソンとキッシンジャーは、ラオス侵攻作戦の失敗によって、ハノイとの交渉妥結が遠のいたことを認めた<sup>37)</sup>。ラオス侵攻作戦失敗の影響は、パリ秘密交渉におけるアメリカの方針転換、北ヴェトナムへの重大な譲歩となって表れた<sup>38)</sup>。5月31日、キッシンジャーはスアン・トゥイに新たな7項目提案を提示したが、その眼目は、北ヴェトナム軍によるインドシナ諸国への浸透停止と引き換えに、南ヴェトナムからの相互撤退の方針を放棄して米軍の一方的な期限付き全面撤退を約束するものであった<sup>39)</sup>。キッシンジャーによれば、「ハノイがインドシナ諸国への浸透をこれ以上は中止することに同意するならば、わが方は相互撤兵の要求をあきらめることにした。この提案の狙いは、アメリカが現実には自軍を一方的に引き揚げていた時に、主張だけは相互撤兵を求めている状態から脱け出すことにあった。敵が浸透を停止するならこちらは兵力残留をあきらめるという取り引きに他ならなかった」<sup>40)</sup>。

先行研究は、北ヴェトナム軍の南ヴェトナム残留を認めたこの方針転換によってヴェトナム和平の破綻が運命付けられたという点に関心を向けているが、本稿は次節で詳述するように、キッシンジャーが南ヴェトナムからの北ヴェト

ナム軍の撤退という直接アプローチではなく、ラオスとカンボジア、とりわけラオスからの浸透の遮断によって南ヴェトナム内の残留北ヴェトナム軍を弱体化させるという間接アプローチへ転換を図ったことに注目する。次節で見るように、キッシンジャーは、残留北ヴェトナム軍は外部からの増援をたたれたら「消耗」せざるを得ない、と考えたのである。以後キッシンジャーは、ヴェトナム和平の鍵を握る要因としてラオス戦線を一段と重視するようになり、ラオスからの浸透遮断、同国からの北ヴェトナム軍の撤退、ひいてはラオス和平を達成できるかどうか、ヴェトナム和平の実現を左右する重要な要因となっていくのである。

#### 4. 秘密了解による解決

##### (1) 北ヴェトナムの態度変化

72年1月25日、ニクソンは国民向け演説でいよいよこの相互撤退原則の放棄を公にした<sup>41)</sup>。ニクソンは同演説でパリでの秘密交渉の存在を暴露したが、ハノイとの交渉はそれほど行き詰っていたのである。ハノイの指導部は、南ヴェトナムからの米軍の一方的撤退という譲歩を勝ち取っても、和平協定の早期締結に向けて態度を軟化させることはなかった。前節で見た5月31日の交渉以後、何度か行われた会談でも北ヴェトナム側は歩み寄る姿勢を見せなかった。それどころか、72年3月30日には3万の北ヴェトナム軍が大挙して非武装地帯を突破し南ヴェトナムへ侵攻した。いわゆる春季大攻勢の始まりである。5月8日、ニクソンは北爆の再開(ラインバックカーI作戦)をもってこれに報復し、戦乱は激化した。

ところが、こうした北ヴェトナムの対決姿勢にも変化が生じる。6月末、ハノイの指導部はついに「戦争戦略」から「平和戦略」への転換を図った。アン・チェン・グアン(Ang Cheng Guan)によれば、その主な理由は、①北ヴェトナム側はまだ完全な勝利を収めていないものの、米軍は撤退を続けており、士気の低下した



南ヴェトナム軍への対処が比較的容易になったこと、②アメリカが南ヴェトナムでの北ヴェトナム軍の残留を認め、さらに平和協定の一環として行われる南ヴェトナムでの選挙前にティエウが辞任することにも同意したこと、③1972年前半の米中和解、米ソデタントの結果、中ソがヴェトナム問題の解決、とくに軍事対立の解決を求めるようになったこと<sup>42)</sup>、④11月に米大統領選挙を控えて、選挙後よりも選挙前の方が交渉妥結の可能性が高いと判断したこと、などであった<sup>43)</sup>。

## (2) 10月合意

こうしたハノイの態度変化によって、9月26、27日のキッシンジャー＝レ・ドク・ト会談は大きな進展を見せた。レ・ドク・トはいくつか重要な譲歩を示したが、なかでも「驚くべき譲歩」は、北ヴェトナム政府が平和協定の締結後、「軍隊をラオス、カンボジアから引き揚げ、ラオスにいるアメリカ人捕虜を釈放する」と約束したことだった。「これによって注目すべき突破口が開かれた」<sup>44)</sup>。これまでラオス、カンボジアでの自国軍の存在を否定してきた北ヴェトナム政府が、初めてその存在を正式に認めて停戦後の撤退を表明したのである<sup>45)</sup>。

26日の協議でレ・ドク・トは当初、インドシナ3国での同時停戦に消極的な態度を見せ、まずヴェトナム問題の解決を優先し、次いでラオス、カンボジア問題に対処するのが、結果的に「最も早い」インドシナ戦争の解決法だと自説を述べた。インドシナの3つの戦争は「密接に関連しており、貴殿とヴェトナム問題を解決しようとしているわれわれが、(ラオスとカンボジアの)戦争の継続を望む理由などないでしょう」。こう説く北ヴェトナム代表に、キッシンジャーは、ラオスとカンボジアの問題をすべてヴェトナムと交渉で扱うのは困難だとしても、少なくとも、停戦をラオス、カンボジアに拡大しなければ、両国で戦闘が続く中でヴェトナムと平和について論じることなど不可能だと反論し

た。従来の要求である国際監視下でのインドシナ同時停戦の実施に加え、北ヴェトナム軍によるインドシナ諸国への兵士、武器・弾薬、物資の増強停止を強く迫った。その結果、レ・ドク・トはついに、ラオス、カンボジアにおける戦闘停止と、両国からの全外国軍の撤退、兵員・武器等の両国への再導入の禁止に同意した。ただし、レ・ドク・トは、こうした規定はラオスとカンボジアの主権にかかわる問題であるため、ヴェトナムと平和協定本文に明記することには反対し、北ヴェトナムとアメリカ2国間の非公式の「了解 (understanding)」に盛り込む形での決着を求めた<sup>46)</sup>。ここに、秘密の了解によるラオス問題の解決のプロセスが始まったのであり、これがやがてヴェトナムとラオスの平和の行く末に暗い影を落とすことになる。

キッシンジャーとレ・ドク・トは10月8日から11日に再度会談し、10月合意と呼ばれるヴェトナムと平和協定案を作り上げた。これまで、この10月交渉においてキッシンジャーが南ヴェトナム政府の了解なく北ヴェトナム軍の南ヴェトナム残留を正式に認めたという点に研究の関心が集まってきたが、次の回想に示されているように、実はキッシンジャーの関心はすでに、北ヴェトナム軍の南ヴェトナム撤退ではなく、同軍によるラオス、カンボジアからの南ヴェトナムへの浸透停止の確約をとりつけることに移っていたのである。

北ベトナム軍撤退の要求は、原則としては確かに妥当なものである。しかし実際上は、10年間3代の米政権にわたる戦争を通じて、この要求が満たされないことが明らかになっていた。この目標は、われわれが全面戦争を行わない、ハノイを完全に敗北させて初めて達成されるものであり、そんなことはアメリカの世論も議会も支持しなかったろう。かくして、われわれとしては、今後も引き続き北ベトナム軍の撤退を要求するが、それを最終解決の条件とすることはできなかった。そんな条件

を要求できる時期は、とっくに過ぎていた。せいぜいわれわれとしては、1971年5月31日の提案に盛り込まれた条項に固執することだった。この条項は、南ベトナムへの新たな兵員と物資の浸透を禁じたもので、レ・ドク・トも今では、これを受諾していた。もしこの公約が守られるなら、北ベトナム軍は、次第に消耗することになる。破られたとしても、同じように守られそうもない撤退条項の方が、われわれに有利だというわけではなかった<sup>47)</sup>。  
(傍点筆者)

それでは、10月交渉の経緯を詳しく見てみよう。10月8日初日の会談でキッシンジャーは、北ベトナム側の交渉姿勢の問題点として、アメリカに要求するばかりで自らに相互的な義務を課そうとしないことと、ハノイの和平提案には南ベトナム以外のインドシナ諸国に関する規定がないことの2点を指摘した。その上でキッシンジャーは、インドシナ全体に関する問題として、①停戦、②ラオス、カンボジアからの外国軍の撤退、③浸透停止、④ラオス、カンボジアで拘留されている捕虜の釈放、の4つの問題に関して議論を求めた。

停戦問題についてキッシンジャーは、ベトナム和平協定の中にラオス、カンボジアを含むインドシナの単一停戦を規定しようとするこれまでの方針に代えて、ベトナム、ラオス、カンボジアそれぞれ個別の、ただし同時に発効する停戦を提案した。またキッシンジャーは、最も重要な問題といえるラオス、カンボジアからの北ベトナム軍の期限付き撤退と北ベトナム国外への兵員・武器等の搬出停止についてレ・ドク・トに確約を求めた<sup>48)</sup>。

翌々日の10日、レ・ドク・トが提出した和平協定案には、ラオス、カンボジアでの戦闘行為の停止、両国からの外国軍の撤退と両国への兵員・武器等の再搬入を禁止する条項が盛り込まれていた。気をよくしたキッシンジャーはさらにこの規定の細部を詰めていく。キッシンジャ

ーにとって北ベトナム案の問題点は、いつこの条項が実施に移されるかが明記されていないことであった。具体的な期限がなければ、ラオス、カンボジアからの外国軍の撤退も単なる努力目標を超えず、強制力を持つ条項となりえない。そこでキッシンジャーは、ベトナム和平協定成立後直ちにラオス、カンボジアで戦闘を停止し、すべての外国軍が両国から撤退することを求めると同時に、アメリカと北ベトナム政府がその影響力を最大限に行使して、ラオス、カンボジアの紛争当事者に問題解決を促していく旨の条項を盛り込むことをも提案した<sup>49)</sup>。

このベトナム和平とラオス、カンボジアの停戦の時期の関係は非常に重要な問題だった。当時キッシンジャーとレ・ドク・トは、ベトナム和平協定の締結から60日以内の米軍の撤退完了という線での合意形成をはかろうとしていた。したがって、ラオスとカンボジアで停戦が同時に発効しなければ、南ベトナムから米軍が撤退した後も両国に北ベトナム軍が居座って内戦が続き、両国からの南ベトナムへの浸透がさらに拡大する危険があった。さらには、拡大する北ベトナム軍の後押しを受けてラオス、カンボジアの共産主義勢力が権力を奪取する事態に至れば、早晩、ベトナム和平も根底から崩れてしまうのだった。

交渉の最終日の11日は、午前9時半からの翌朝2時までの16時間のマラソン交渉となったが、そこでもっとも難航したのが、ラオス、カンボジアの問題だった。インドシナ3国での同時停戦を主張するキッシンジャーに対して、レ・ドク・トはラオスの停戦については前向きな姿勢を見せつつも、カンボジア停戦への関与を頑なに拒否した。レ・ドク・トいわく、カンボジア問題は、ラオスの問題よりはるかに複雑でアメリカと北ベトナムの2国で解決できる問題ではなかった。実は、当時北ベトナムと、独自路線を歩むカンボジア共産党との関係が悪化し、前者の後者に対する影響力に限界が生じていたのであった<sup>50)</sup>。それゆえ、レ・ドク・ト

はラオスの停戦のみ議論すべきであるとしたうえで、ヴェトナム和平協定締結から1カ月以内のラオス停戦を提案した。しかも、この合意はヴェトナム和平協定本文とは別に結ばれる秘密了解に規定することを条件とした<sup>51)</sup>。

従来の方針からすれば、キッシンジャーにとってこの停戦の時間差は到底受け入れられないはずであったが、彼は11日の会談で、この時間差のある停戦要求を呑んだのであった。また、キッシンジャーは北ヴェトナム軍の期限付き撤退を求めたものの、レ・ドク・トは、ラオス停戦後外国軍は「可能な限り早く」撤退するという曖昧な表現に終始し、具体的期日に関して言質を与えなかった。結局、この日の成果として、キッシンジャーはレ・ドク・トと、①ヴェトナム和平協定から1カ月以内にラオス停戦を実現すること、②ラオスからの外国軍の撤退と同国への浸透停止等の実施形態については、ラオス停戦後に当該諸外国のあいだで調整を図ることとする、の2点について非公式の了解に至った<sup>52)</sup>。

ここで要点を整理しておくと、ヴェトナムとラオスの問題について、キッシンジャーとレ・ドク・トは二重の合意を結んだことになる。ひとつは、やがてヴェトナム和平協定の第20条となる規定である。関連箇所を抜粋すると、第20条は、

(A) ヴェトナムに関するパリ会議に参加した当事者はカンボジアに関する1954年ジュネーブ協定と、ラオスに関する1962年ジュネーブ協定を厳密に尊重する。これらはカンボジアとラオス人民の基本的民族権、これら諸国の独立、主権、統一ならびに領土保全を認めたものである。当事者はカンボジアとラオスの中立を尊重することとする。

ヴェトナムに関するパリ会談参加の当事者はカンボジアとラオスの領土を使用して、お互いならびに他国の主権と安全保障を侵害するようなことはしないことを約束する。

(B) 諸外国はカンボジア、ラオスにおける

一切の軍事活動を終結させ、これら両国から全面的に撤退し、再び両国に軍隊、軍事顧問および軍事要員、武器、弾薬ならびに軍事資材を導入することを差し控える。

と規定している。この条文は一般原則を記したものであって、(B)項には、具体的な期日が記されていない<sup>53)</sup>。より重要な取り決めは、先に見たように非公式の了解として取り結ばれたのだった。協定本文と別に非公式の了解を結ぶなら、そこでこそ、キッシンジャーはアメリカ側の要求を通さなければならなかった。にもかかわらず、非公式了解の内容は、明らかに北ヴェトナムを利するものであった。キッシンジャーはこれまでのインドシナ同時停戦の原則を曲げて、ヴェトナム和平とラオス停戦の間に1カ月の時間差を設けることに同意しただけでなく、外国軍の撤退についてもラオス停戦後その実施形態について調整する、とただで北ヴェトナム軍の撤退期日を設定できなかったのである。

なぜキッシンジャーはこのような了解を受け入れたのだろうか。ひとつには、レ・ドク・トが上記条件での非公式了解に固執したため、それを受け入れざるを得なかったからであろう。すでに相互撤退を断念し北ヴェトナム軍の南ヴェトナム残留を認めてしまった以上、キッシンジャーはラオス停戦に関して何らかの合意を持ちかえらなければならなかった。また、キッシンジャーには時間との戦いもあった。ニクソンと異なって、キッシンジャーは翌月に迫った米大統領選挙前の交渉妥結を望んでいた。ニクソンは大統領選での大勝を予期して、選挙前の協定締結にこだわらなかった。むしろ、ヴェトナム和平協定を選挙のための得点稼ぎに利用し、そのために同盟国の南ヴェトナムを裏切ったとメディアに批判される事態を是非とも避けたかった。他方、キッシンジャーは選挙までに交渉を纏め上げなければ、北ヴェトナムが再び態度を硬化させて和平交渉が振り出しに戻ることを警戒していたのである<sup>54)</sup>。

### (3) インドシナ諸国の反発と再調整

10月19日、北ヴェトナムとの和平協定案を携えてキッシンジャーはティエウとの交渉に臨むべくサイゴンに乗り込んだ。当初の予定では、サイゴンを訪問したあと、その足でハノイを訪問して和平協定の成立を世界に向けて発表する予定であった。

驚くべきことに、キッシンジャーは北ヴェトナムとの交渉の詳細、協定案を事前にサイゴン政府に伝達していなかった<sup>55)</sup>。実は、キッシンジャーには伏せていたが、ティエウは和平協定案を解放戦線から押収した資料の中から入手し、その骨子をすでに承知していた。協定案を目にしたティエウは、アメリカの「裏切り」を確信する<sup>56)</sup>。「問題の根本は、キッシンジャーが(ティエウを)全く同盟者として扱っていなかった」ことにあった<sup>57)</sup>。ティエウは、アメリカと北ヴェトナムの秘密交渉を第2次世界大戦前夜のミュンヘン会談になぞらえ<sup>58)</sup>、キッシンジャーはあたかも「ハノイの代表」として協定案を押し付けにサンゴンにやってきたようだったと、のちに回想している<sup>59)</sup>。

サイゴン政府にとって和平協定案は欠陥だけであったが、最も深刻な問題は、現状凍結停戦による北ヴェトナム軍の残留であった。北ヴェトナム軍に残留を認めるとは、侵略者に「褒美を与える」にも等しく<sup>60)</sup>、絶対受け入れられないものであった。ティエウはニクソンに宛てた電報で、万一北ヴェトナム軍の残留を許容したら、何のためにこれまでアメリカと南ヴェトナムの両国が多く犠牲を払ってきたのか全く意味がなくなってしまい、アメリカ軍は「侵略者」として、そして南ヴェトナム軍はその「傭兵」として「誤った大義」の戦争を戦ってきたことになるのだと、抵抗の構えを見せた<sup>61)</sup>。

ティエウは国家安全保障会議を招集して協定案を検討した。協定案の主な問題点として、北ヴェトナム軍の残留のほか、解放戦線の臨時革命政府を政府として認めていること、臨時革命政府との事実上の連合政府の樹立が謳われてい

ること、南北ヴェトナムが単一国家として扱われていることなどが指摘されたが、同時にラオス、カンボジアでの停戦条件、とりわけヴェトナム和平と両国の停戦の時間差が重大な欠陥として指摘された<sup>62)</sup>。キッシンジャーは、ラオス、カンボジアからの浸透停止にハノイが同意したため残留北ヴェトナム軍は衰弱していくと説くが、その重要であるはずのラオスの停戦がヴェトナム和平と同時に発効するのではなく、1カ月後というのは一体どういうことなのか。北ヴェトナム軍がラオス、カンボジアを浸透路や発進基地として利用する限り、南ヴェトナムの防衛はいつまでもままならないのである。

ヴェトナム和平成立後、北ヴェトナム軍はラオス、カンボジアから撤退しなければならないが、果たしてそうするだろうか。こうした疑念は、カンボジアのロン・ノル(Lon Nol)や、タイ首相のタノム(Thanom Kittikachorn)からも寄せられた<sup>63)</sup>。そしてラオス首相のプーマも、10月27日のニクソンとの会談で語ったように、ヴェトナム停戦とラオス停戦の1カ月の時間差を憂慮していた。プーマは、ラオスに先行してヴェトナムで停戦が発効した場合、北ヴェトナム軍の戦闘部隊がパテト・ラオ支援の目的で南ヴェトナムからラオスに移動することを恐れていたのであり、その意味において、ヴェトナム単独での停戦はラオスにとって有害ですらあった。プーマは一時、ハノイと独自に接触を図って、ヴェトナム協定に先立つラオス和平さえ検討していた<sup>64)</sup>。

結局南ヴェトナム政府は、キッシンジャーが持参した協定案に69カ所もの修正を要求して、現内容での協定締結に断固反対の姿勢を見せた。これにより大統領選挙前の和平は不可能となり、キッシンジャーはハノイ訪問の予定を変更して帰国し、北ヴェトナムとの再交渉に臨むことになる。

11月7日、ニクソンは民主党候補ジョージ・マクガバン(George McGovern)に歴史的な大勝を収めた。選挙後、ニクソン政権はヴェトナム

問題の解決に向け、南北ヴェトナムそれぞれに圧力をかけていく戦術をとった。一方では、ニクソンが翌年1月の協定成立までティエウに何度も直接メッセージを送って協定の締結を迫っていく<sup>65)</sup>。ニクソンは硬軟織り交ぜた説得を行った。アメリカの裏切りを喧伝するサイゴン政府に対して、ニクソンはアメリカ政府の「深い失望」を語り、両国同盟関係の「危険な漂流」を指摘した。ニクソンはティエウに「拒否権」を認めず、南ヴェトナムが和平の「障害」とならぬよう警告した。重要なことは協定文に何が書かれているかではなく、協定が敵によって破られた際にどう対処するかであった。ニクソンはティエウに、協定違反が生じた場合、アメリカ政府は北ヴェトナムに対して「迅速かつ容赦のない報復行動」をとる旨の「絶対的な保証」を与えた。だが同時に、サイゴンがそれでも協定の締結を妨害するなら、議会、国民の支持を得られないとして南ヴェトナムへの援助停止に言及した<sup>66)</sup>。

他方、キッシンジャーは、11月後半と12月前半にレ・ドク・トと会談し、協定案の修正にあたった。この2度の会談でキッシンジャーは、インドシナ同盟諸国の懸念を払拭すべく、10月合意以前の方針に立ち返ってインドシナ3国での「同時停戦」を求めた<sup>67)</sup>。なぜ、ヴェトナムと同時にラオスで戦闘を停止できないのか。もしヴェトナム和平協定締結後もラオスでの戦争が1カ月続くのであれば、アメリカはラオスを爆撃せねばならない。その結果、北ヴェトナムとの戦闘が激化してヴェトナムが再び戦闘に引き込まれて和平が破綻してしまうかもしれない。ラオス国内では10月17日からプーマ政府側とパテト・ラオによる停戦交渉が始まっており、キッシンジャーはアメリカと北ヴェトナムが互いにラオス国内の関係勢力を説得してヴェトナム和平と同時のラオス停戦を実現しようと試みた。だが、レ・ドク・トは、ラオス停戦は他国の問題であって圧力をかけて同時停戦を強要することなどできないとの一点張りだった<sup>68)</sup>。

12月の会談でキッシンジャーは、ヴェトナムで停戦が成立してもラオスで停戦が成立しなければ、「われわれは残余の空軍力をすべてラオスに集中させるつもりだ」とラオスでの戦争の継続も辞さない構えを見せた。キッシンジャーは妥協案として、ヴェトナム和平とラオス停戦までの時間差を10日以内に短縮するよう求めたが、レ・ドク・トは20日以内を主張して、両者の議論は平行線をたどった<sup>69)</sup>。結局妥結に至ったのは、翌年の1月9日から11日にかけて行われた会談であり、両者は中間をとってヴェトナム和平協定締結から15日以内のラオス停戦で合意した<sup>70)</sup>。

#### (4) ヴェトナム和平協定の成立

1973年1月23日、キッシンジャーは、レ・ドク・トとパリでヴェトナム和平協定の仮調印を行った。同日午後10時、全米テレビ放送においてニクソンはヴェトナム和平の達成を国民に向け発表した。大統領は、南ヴェトナム・ティエウ政権の「全面的な支持」を得て積み重ねてきた交渉によって、アメリカ政府が求めた「すべての条件」を満たした「名誉ある平和」を成し遂げたのだと力説した。われわれは「同盟国を裏切ることなく、また、われわれの戦争捕虜を見捨てることもなく」平和を達成した。アメリカが成し遂げた平和は、アメリカだけが都合よく戦場から抜け出し、インドシナの人々を戦乱の中に置き去りにするようなものではないと、ニクソンは名誉ある撤退を誇ったのである<sup>71)</sup>。

果たして、ニクソンとキッシンジャーが成し遂げた平和は、名誉ある平和だったのか。この点に関する歴史家の評価は厳しい。キンボールやハニマキは、ニクソンとキッシンジャーが成し遂げたのは名誉ある平和ではなく、南ヴェトナム政府の最終的な崩壊までのある程度の時間稼ぎであったと評価する<sup>72)</sup>。いわゆる「適当な間隔 (decent interval)」論と呼ばれるものである。アイザックソン (Walter Isaacson) によれ

ば、キッシンジャーはヴェトナム和平協定締結直後、ある人にこの協定のもとでティエウ政権がどの程度生き延びられるかとたずねられると、「運がよければ、1年半というところだろう」と、にべもなく返答したという<sup>73)</sup>。バーマンは、議会による戦争権限の制限、インドシナへの軍事支援の禁止措置がなければ、ニクソン政権は北ヴェトナムへの協定違反に大規模爆撃で報復する決意であったと述べて「適当な間隔」論を否定するが、これはニクソンがヴェトナム和平協定そのものにほとんど信頼を寄せていなかったことを示している。バーマンによれば、むしろ北ヴェトナムとの戦争の継続を前提に、撤退後、インドシナへの再関与と報復行動の根拠を手に入れるためにニクソンはヴェトナム和平協定を必要としたという<sup>74)</sup>。

最後に、ヴェトナム和平交渉の過程を最も克明に記したアセリンの研究も評価が厳しい。アセリンは、南ヴェトナムの命運は、戦場ではなく交渉テーブルで決められたとし、1975年のサイゴン陥落もヴェトナム和平協定の必然的帰結であったとみる。アメリカと北ヴェトナムは、和平協定の履行が困難なことを知りつつ、協定の中身より協定の締結という形式を重視し、曖昧かつ機能しない合意を「共謀」して作り上げたと批判している。アメリカは、捕虜の釈放、降伏なき撤退、冷戦対立における自国の信頼性の維持、一方北ヴェトナムは、米軍の撤退、自国での社会主義革命の実現と南北ヴェトナムの統一に向けた条件整備という目的を達成するために和平協定を必要としたのであって、ヴェトナムで真の平和を達成したわけではなかった<sup>75)</sup>。

ティエウも、協定の締結によってヴェトナムに平和が訪れるとはまったく思っていなかった<sup>76)</sup>。北ヴェトナム軍と解放戦線は、和平協定締結後しばらく平穏を装い、米軍の報復を招くような大規模な戦闘行為には打ってでないだろう。だがそのあいだに軍隊を南ヴェトナム全体に展開して「ナイフや銃剣」で南ヴェトナム政

府要人を殺害や誘拐し、米軍のインドシナ撤退の完了を待って再びゲリラ戦に打って出ると予想されたのである。ティエウに残された選択は、ゲリラ戦が再燃することを承知しつつ、それでも協定に調印し、アメリカの支援の継続を得るか、それとも協定の調印を拒否してアメリカの支援を失うかの二者択一であった<sup>77)</sup>。ニクソンによる「全面的な援助停止」の脅しに押され<sup>78)</sup>、やむなくティエウは前者の道を選択したのだった。彼にとってヴェトナム協定は、決して和平協定などではなく、「アメリカの支援の継続を得るための協定」だったのである<sup>79)</sup>。

24日の記者会見でキッシンジャーは、ヴェトナム和平協定には南ヴェトナムへの浸透行為を禁止する条項が含まれており、これによって南ヴェトナム内の北ヴェトナム軍は消耗し最終的に消滅していくと楽観を呈した<sup>80)</sup>。しかし、ティエウは「自殺行為」に等しい浸透禁止条項をハノイが遵守するはずなどないと考えていたのである<sup>81)</sup>。現実主義者ニクソンも、内心、ティエウと同じ印象を抱いていた。「北ヴェトナムは、兵士の増員を南に送り込むことを許されず、非武装地帯とラオス、カンボジアの中立を尊重することに同意した。もしハノイがこれを完全に遵守するなら、南ヴェトナムに駐留している軍隊は孤立し、新規供給と増援を完璧に途絶されるだろう。だが、北ヴェトナムがこれらの協約を出し抜こうとするかどうかという点に関して、私は幻想は抱きはしなかった」<sup>82)</sup>。

1月27日、パリ国際会議場大広間にて、アメリカ、北ヴェトナム政府、南ヴェトナム政府、南ヴェトナム臨時革命政府（解放戦線）の関係4者が「ヴェトナムの戦争終結と平和回復に関する協定」に調印し、ヴェトナムでの停戦が発効した。これによって、インドシナに平和が到来したのだろうか。次節で、ティエウとニクソンの不吉な予想が現実のものとなっていく過程を見ることにしよう。

## 5. ラオス和平の模索

ここまで見てきたように、キッシンジャーは南ヴェトナムから北ヴェトナム軍を撤退させるのではなく、ラオス、カンボジアからの同軍の浸透停止によってヴェトナムでの和平を維持しようと試みた。それゆえ、キッシンジャーにとってのヴェトナム和平の課題は、その協定調印によって完了したわけではない。秘密了解で規定したヴェトナム協定締結から15日以内のラオス停戦と同国での和平の実現をもって初めてヴェトナム和平の基盤が整うのである。本節では、ヴェトナム和平協定後のラオス停戦問題をめぐるキッシンジャーとレ・ドク・トの交渉過程を分析し、ヴェトナム和平を破綻に導いた要因の一端としてラオス問題の重要性を指摘したい。

### (1) ラオス停戦問題とハノイ交渉

ニクソンは、ヴェトナム和平におけるラオス、カンボジアの重要性を次のように認識していた。

ハノイが軍隊をラオス及びカンボジアから撤兵させない限り、南ヴェトナムに平和が来ないことを、私は勿論認識していた。南ヴェトナムの生存は究極的には、民主主義政体や有能な軍隊を持つか否かではなく、単純に地政学的な要因によって規定されていたのである。南ヴェトナム国内で戦闘が起こったとすると、ラオス及びカンボジアを握ることが決定的な意味を持つ。重要な軍事上の優位は、事実上全て（中略）この2国を誰が支配するかにかかっていた。もし北ヴェトナムが、これら2国を自軍の前進基地化するのに成功したとすれば、南ヴェトナム生存の見込みはとても薄くなってしまおう<sup>83)</sup>。

まさにキッシンジャーはこれまで、レ・ドク・トとの交渉においてラオスからの北ヴェトナム軍の撤退の確約を取り付けるべく苦心してきたのであった。秘密了解の規定によれば、ヴェト

ナム和平協定締結から15日以内、すなわち2月12日までにラオスで停戦が成立する予定であった。ラオスで停戦が成立して初めて同国からの北ヴェトナム軍の撤退が実施されるのである。ところが、その15日以内のラオス停戦が実現困難なことが次第に明らかになってきた。プーマ政府とパテト・ラオによる和平交渉は72年10月に始まっていたものの、遅々として進んでいなかった。むしろ72年末には、最終的な停戦を睨んで、停戦前にできる限り支配地域を拡大しようと、アメリカの支援を得た王国政府軍＝タイ義勇軍とパテト・ラオ＝北ヴェトナム軍の戦闘は激化していた。ラオスにおける北ヴェトナム軍のプレゼンスは減退するどころか、ヴェトナム和平協定後、北ヴェトナム軍1個師団が新たにラオス南部に投入され、「ホー・チ・ミン・ルート」を南下するハノイの再補給は、米軍の爆撃にもさらされずに大規模に、戦争中よりも不気味なまでに急ピッチで進められ」ていたのである。キッシンジャーは当時を振り返って、「パリ協定調印から2週間にもならないのに、もう破綻が見えていた」と回顧録で語っている<sup>84)</sup>。

非公式の取決めが裏目に出たことを、キッシンジャーは痛感したにちがいない。結局、ラオスに関してキッシンジャーがレ・ドク・トとの了解で確認できていた点は、ヴェトナム和平協定から15日以内の停戦だけであり、もっとも重要な北ヴェトナム軍の撤退については何の具体的確約も得ていなかったのである。ラオスからの撤退に関しては、単に同国での停戦成立後に当該諸外国がその形態について協議することで合意しただけにとどまっていた。

したがって、2月10日、ハノイを訪問したキッシンジャーが、協議の最重要事項のひとつにラオス問題を据えたのは当然のことであった。ラオスからの撤退を遅らせるために、ハノイが意図的にラオス内の和平交渉を遅らせていると感じとったキッシンジャーは<sup>85)</sup>、11日、北ヴェトナム首相ファム・ヴァン・ドン (Pham Van Dong) と会談した際、ラオス停戦後直ちに軍隊

を撤退させるよう強く求めた。プーマ政府とパテト・ラオの和平交渉は、ヴェトナム和平交渉同様、政治問題（連合政府の樹立等）と軍事問題（停戦、外国軍の撤退等）の同時解決をめぐって難航していたため、キッシンジャーはまず停戦の成立を優先して解決するようパテト・ラオに影響力を行使することをハノイの指導者に求めたのだ<sup>86)</sup>。

ところが、会談に同席していたレ・ドク・トは、秘密了解で規定しているのは、停戦成立後、ヴェトナム和平協定第20条B項の履行について協議することであって、即座の撤退ではないと反論した。72年10月交渉で、レ・ドク・トが第20条B項に期限を付すことに反対し、非公式の了解によってヴェトナム和平とラオス停戦を切り離したのも、こうしてラオスからの北ヴェトナム軍の撤退を骨抜きにするのを意図してのことだったのかもしれない。だとすると、キッシンジャーはハノイの術中にはまったことになる。

ファム・ヴァン・ドンとレ・ドク・トはさらに条件を吊り上げて、北ヴェトナム軍の撤退には、彼らの同盟者であるパテト・ラオの同意が必要だと抵抗した。北ヴェトナム軍はパテト・ラオの要請で軍を派遣しているのであって、彼らに相談もなく勝手に撤退などできないのだという。これは、秘密了解にも書かれていない法外な主張であった。キッシンジャーは、ラオス現地勢力の了承がなければ、外国軍は撤退できないなどという、奇妙な国際関係の論理は聞いたことがない、と反駁した。

キッシンジャーにとって重要な問題は、撤退期限の開始時点をいつに設定するかであった。当時、ラオス内での交渉では外国軍の撤退期間に関して、プーマ政府側が60日以内、パテト・ラオ側が90日以内を主張していたが、キッシンジャーの関心は、撤退期間が60日以内であるか、90日以内であるかよりも、それがどの時点から始まるのかに向けられていた。1日も早い北ヴェトナム軍の撤退を望むキッシンジャーは、停

戦成立時からの撤退の開始を求めたのに対し、レ・ドク・トは、外国軍の撤退はラオスでの政治問題解決が済んだ後に開始するべきだと、さらに撤退を先送りする構えを見せたのである。ハノイのこうした要求に憤ったキッシンジャーであったが、彼には対抗する術はなかった。南ヴェトナムの状況と異なって、ラオスにはもともとアメリカの戦闘部隊が展開しておらず、北ヴェトナムに撤退を求める取引材料に乏しかったのである。また、3月末にヴェトナムからの米軍の撤退が完了することになっているなかで、ラオスでの軍事行動に国民の支持を得るのは極めて困難だった。さらに、ラオスでとらわれている捕虜をとり戻すためにも、ラオスでの停戦がどうしても必要だったのである。

このような立場に置かれていたキッシンジャーは、再び譲歩を示し、北ヴェトナム側の主張通り外国軍の撤退を政治問題の解決後とし、その代わりに、停戦から15日以内に政治問題を解決するよう、ラオス現地勢力に圧力をかけていくことを提案した。翌日12日の協議でさらにキッシンジャーは折れて、停戦から30日以内の政治的解決、そして政治的解決後30日から90日以内の期間での外国軍の撤退という線でラオス現地勢力を説得していくことで合意に至った<sup>87)</sup>。

こうした空虚な言葉遊びにも思える北ヴェトナムとの合意に、キッシンジャーはいかほどの価値を見出していたのだろうか。無論、キッシンジャーは、ラオスから北ヴェトナム軍を撤退させるのは不可能であると自らの交渉戦略の破綻を認めるわけにはいかなかった。ラオスからの浸透停止によって南ヴェトナム内の残留北ヴェトナム軍に対処できると繰り返し述べてきたキッシンジャーは、たとえ形式に過ぎなくともラオスからの北ヴェトナム軍の撤退期日を盛り込んだ合意を取り付けることが必要だった。とはいえ、これまでの北ヴェトナムの交渉姿勢を客観的に考慮すると、その軍隊の撤退を信じることを可能にする判断材料は何ひとつなかった。



(2) ラオス空爆論議

当初予定されていた2月12日から9日後の21日、「ラオスにおける平和回復と民族和解に関する協定」(ラオス平和協定)が締結された。アメリカと北ヴェトナムの要求を部分的に取り入れ、プーマ政府とパテト・ラオは次の主要な点で合意した。まず、翌日22日正午をもって停戦が発効し、停戦から30日以内に臨時連合政府と政治諮問評議会を設立した後、これらの機関の協議を経て連合政府を樹立するための選挙を実施することが規定された。キッシンジャーの最大の関心事であった外国軍の撤退は、臨時連合政府と政治諮問評議会の設立後60日以内に完了するものとされていた<sup>88)</sup>。

こうして、ラオスからの北ヴェトナム軍の撤退期限を手に入れたニクソン政権であったが、問題は、北ヴェトナム政府がこのラオス協定を遵守するかどうかであった。停戦成立後、4月中旬までに3万5000人の北ヴェトナム兵が南ヴェトナム、ラオス、カンボジアに侵入して<sup>89)</sup>、その浸透の速度は緩むどころか加速していた。4月中旬、東南アジア視察から戻った国家安全保障問題担当次席大統領補佐官のアレキサンダー・ヘイグ (Alexander M. Haig) は、ハノイによるヴェトナム平和協定の「体系的な」違反に注意を喚起した。ハノイによる数々の違反のなかで「もっとも深刻な」問題が、ラオス、カンボジアでの北ヴェトナム軍の駐留の継続であった。ラオスでは、臨時連合政府と政治諮問評議会の設立期限であった3月23日もすでに経過しているが、それが履行される見通しはまったく立っていなかった。ヘイグは、ハノイがラオス協定を盾にとりてアメリカの空爆を牽制し、その間インドシナ諸国への浸透を増大させている危機的状況を指摘した<sup>90)</sup>。

このままハノイによる協定違反を座視してよいのか。3月から4月にかけて、ホワイトハウス内に設置されていたワシントン特別行動グループ (WSAG) でラオスへの空爆が何度も議論された。キッシンジャーは、アメリカの空

軍力こそ、ヴェトナム戦争の「全面再開を押しとどめる不可欠の抑止力」と考え<sup>91)</sup>、ラオス領内のホー・チ・ミン・ルートへの爆撃を検討した。キッシンジャーは、前年12月の段階で次のように駐米南ヴェトナム大使に語り、空爆の必要性を説いていた。「貴殿は、私がレ・ドク・トを信用しているとお考えでしょうか。彼らは当然、不正をするでしょう。しかし、もし彼らがホー・チ・ミン・ルートを利用して我々がホー・チ・ミン・ルートを爆撃しても、我々は法的に強い立場にあるのです」<sup>92)</sup>。

ラオスへの爆撃は、4月上旬に訪米したティエウが強く要求したのもであった。記者との懇談の席でティエウは、アメリカがラオス、カンボジアから北ヴェトナム軍の浸透を遮断してくれれば、南ヴェトナム内の残留北ヴェトナム軍には自分たちで対処できるが、アメリカの空軍力なしにラオス、カンボジアでの北ヴェトナム軍の増強には対抗できない、と語った。南ヴェトナム政府の「生存」は、「持続的なアメリカの経済援助」と、北ヴェトナムの浸透を遮断する「ラオス、カンボジアでのアメリカの爆撃」にかかっていたのである<sup>93)</sup>。

当初、ニクソンもラオスへの爆撃の必要性を認めていた。大統領は、「かりにわれわれがラオスとカンボジアでむざむざ引き下がるようであれば、ベトナムでもいずれ同様になりはしないか」と憂慮していた<sup>94)</sup>。主席補佐官のハルドマン (H.A. Haldeman) が3月20日の日記に記しているように、ニクソンはラオスへの爆撃がハノイの協定違反に対する「唯一可能な報復行動」と考えていた<sup>95)</sup>。南ヴェトナムからの撤退期限が秒読みの段階になって、北ヴェトナムへの爆撃を再開することなどはや不可能であり、アメリカが北ヴェトナムの協定違反に毅然とした対応を示す場所は、ラオスに限られていたのである。

3月14日、WSAGの検討会議を経て、キッシンジャーは大統領にホー・チ・ミン・ルートへの爆撃を勧告した<sup>96)</sup>。再度4月中旬にB-52によ

るラオス北部国道7号線沿いと南部のホー・チ・ミン・ルートへの大規模爆撃を勧告した際、キッシンジャーは、北ヴェトナムの「新たな軍事的冒険」にアメリカは「猛然と対抗する」決意であることを確信させるなら、いまがまさにその「さらなる直接行動」をとる時期だと、大統領に決断を迫った<sup>97)</sup>。

しかし、3月中旬以降、大統領の態度は二転三転し、優柔不断を呈したという<sup>98)</sup>。ニクソン自身の説明によれば、ヴェトナム停戦から2カ月しか経っていない時期に「軍事的な報復を行うのは気が進まず、また3月27日に予定されている戦争捕虜解放の実現を危うくしたくなかった」からであった<sup>99)</sup>。だが、より切実な理由は、自ら引き起こした政治スキャンダル、ウォーターゲート事件の影響だった。ニクソンが空爆ではなく、ヴェトナム和平協定に規定されている経済援助条項を梃子にハノイの行動を抑制しようとしたのは、自らの政治スキャンダルから世間の関心を逸らすためにラオスへの空爆を利用していると解釈されて、世論や議会の反感を買うのを恐れていたからである<sup>100)</sup>。結局ニクソンは、4月16、17日にラオス北部での爆撃を許可したものの、「問題の核心」である南部の北ヴェトナム浸透路への爆撃には踏み切らなかった<sup>101)</sup>。後にニクソンは、自らの判断を次のように後悔する。

私は4月には何度となく、共産側の停戦違反が継続されるならば報復行動を取ると警告したが、結局何の行動も取らなかった。北爆再開もしなかったし、ラオス国内を移動する北ヴェトナム軍への攻撃も行わなかった。これは大きな誤りであった。

我々の自制は、軍事的に大きな意味を持っただけではなかった。乾季が終わろうとしていた4月、ホー・チ・ミン・ルートに沿って少数の重要な目標がまだ残されていたが、我々が行動を起こさなかったために、破滅的な政治的先例となってしまった。即ち、ハノ

イは、パリ協定の文言をこれみよがしに振り回しておいて、実際にはうまくすり抜けることが可能だと気づいたのであった<sup>102)</sup>。(傍点筆者)

ニクソンが「唯一可能な報復行動」を発動しなかったことの意味は非常に大きい。この4月の爆撃の機会を逃したニクソンは、ウォーターゲート事件による国民の政権不信、議会によるインドシナへの再介入禁止の立法化がますます強まるなかで、ティエウに誓約していた報復行動を発動する機会を失っていった。ニクソンとキッシンジャーは、議会が73年夏にインドシナ再介入禁止措置、さらに行政府の戦争権限の規制措置を可決しなければ、アメリカは北ヴェトナムに対して報復行動をとり、ティエウ政権の崩壊を防いでいたと主張するのだが<sup>103)</sup>、だとすると、おそらく、それを実践する最後の機会がこの73年4月のラオスへの爆撃だった。

### (3) ラオスとヴェトナムの和平破綻

5月中旬(17日～23日)と6月前半(6日～9日、11日～13日)、キッシンジャーはレ・ドク・トと会談を重ねてヴェトナム和平協定のすみやかな履行を求めた。この2度の会談でもラオスでの政治問題の解決が重要なテーマとなった。前回2月の会談で合意された3月23日までの政治問題の解決ははまだ達成されていなかった。その間、ラオスへの北ヴェトナム軍の浸透はいっそう拡大して、5月1日時点で8万5000人の北ヴェトナム軍がラオス内に駐留していた<sup>104)</sup>。

キッシンジャーは、ラオス、カンボジアからの北ヴェトナム軍の撤退は、ハノイに対する経済援助、また両国の国交正常化の前提条件であると訴えたが、レ・ドク・トは、経済援助はアメリカの義務であって無条件に行われるべきものと反駁した<sup>105)</sup>。6月13日、両者は、遅くとも73年7月1日までに臨時連合政府を設立するようラオス諸勢力に求めると同時に、それから

60日以内の外国軍の撤退を規定した合意に同意した<sup>106)</sup>。

ただし、これによって北ヴェトナム軍が本当に撤退の約束を守るとキッシンジャーが信じていたようには思えない。というのも、6月7日の会談でレ・ドク・トは、ラオスにいるアメリカ軍は「侵略軍」であるので無条件に撤退しなければならないのに対して、北ヴェトナム軍はパテト・ラオの要請により駐留しているため、撤退にもパテト・ラオの同意が必要なのだとここでも述べている<sup>107)</sup>。これでは、パテト・ラオが要請する限り、北ヴェトナム軍の残留は正当化されるのであって、事実上撤退の意思がないことを暗示していたのであった。

キッシンジャーは、2月の協議で、ラオスでの停戦を優先して政治問題の解決を後に回し、またそのことによって北ヴェトナム軍の撤退期限を先延ばししたのもある。ヴェトナム和平にはラオスからの北ヴェトナム軍の撤退が不可欠だと一貫して主張してきたキッシンジャーだったが、現実には、2月の会談で、同軍の撤退を政治問題の解決後とすることに応じたことにより、軍事停戦後も北ヴェトナム軍の残留を許すことになったのである。つまり、キッシンジャーは南ヴェトナムにおいてだけでなく、相次ぐ妥協によってラオスでも北ヴェトナム軍の残留を事実上認め、浸透遮断によるヴェトナム和平という自らの戦略の破綻を招いたのだった。

9月14日、ようやく臨時連合政府と政治諮問評議会の設立を謳うラオス和平協定の議定書が調印されたが、実際に連合政府と政治諮問評議会が樹立されたのは、翌年4月になってからだった。連合政府が機能しないことは初めから明らかであった。プーマ派とパテト・ラオによる連合政府は、重要事項の決定に関し全会一致方式を採用し、また各省庁の大臣と副大臣はそれぞれ反対の派閥から選出されたため、政策決定は機能不全に陥った。また、連合政府の首相職はプーマが引き続き担ったものの、王国議会に事実上取って代わる政治諮問評議会はパテト・ラ

オ指導者のスパーヌウォン (Souphanouvong) が議長に就任して主導権を握ったため、権力の統合を図ることができなかった<sup>108)</sup>。さらに、形式上、王国軍とパテト・ラオの両派が同数の人員を供出して合同軍・合同警察を創設することになっていたが、パテト・ラオ側は「筋金入り」の解放軍を送り込んで質的に王国軍を圧倒し、治安維持機構の実権を握った<sup>109)</sup>。

こうした中、アメリカ議会は、73年8月15日以降、南北ヴェトナム、ラオス、カンボジアでの直接・間接の支援戦闘行為にいかなる資金の使用も禁止した歳出法を成立させた。この結果、「インドシナまたはその周辺のどのような場所においても、アメリカの軍事行動はすべて違法となった」。アメリカのインドシナからの撤退が決定的になる中、タイ政府も義勇軍の撤退を開始し、74年5月に完了した<sup>110)</sup>。このようにアメリカ政府は、ラオスでも北ヴェトナム軍を放置したまま、自らは手を引いていくことになったのである。

73年9月、南ヴェトナム外務大臣グエン・フー・ドク (Nguyen Phu Duc) と会談した際、キッシンジャー新国務長官は、議会の制限によってラオスへの爆撃が「不可能」になったとし、ラオスと南ヴェトナムの将来について、次のように語った。「(ラオスは) パテト・ラオが領土の大部分を支配し、(プーマ) 政府側が人口の大部分を管理する形で、国家が垂直に二分されることになるでしょう。あなた方は、南ヴェトナムの軍事情勢に対処できるでしょう」<sup>111)</sup>。

その後の事態は、キッシンジャーの予測を超えて、ラオス、南ヴェトナム両国の共産化に帰結した。アメリカとタイの関与をプーマ政府側が失うなかで、パテト・ラオは拡大する北ヴェトナム軍を後ろ盾に徐々に権力を掌握していった。同時に、北ヴェトナムはラオスを拠点に南ヴェトナムへの浸透をさらに拡大した。1973年には10万人の、74年には前半期だけでさらに8万人の北ヴェトナム兵がホー・チ・ミン・ルートに送り込まれ<sup>112)</sup>、75年4月のサイゴン奪取に

向けた準備を整えていった。こうして表裏一体の関係にあったラオスとヴェトナムの和平は、ともに破綻を迎えることになったのである。

## おわりに

最後に、本稿の考察を通じて明らかになった点を整理しておきたい。

第1に、ニクソン政権のヴェトナム和平戦略は、ラオス、カンボジアも含めたインドシナ全域での包括的解決を前提とするものであった。とくに、ホー・チ・ミン・ルートを経由したラオスから南ヴェトナムへの北ヴェトナム軍の浸透を停止できるかどうか、ヴェトナム和平の成否を握る鍵と位置づけられていた。しかし、ヴェトナム化政策を推進する目的で行われたカンボジア、ラオスへの軍事侵攻、戦線拡大が、上記のインドシナ包括和平計画の遂行を困難にした。戦線の拡大は、結果的にラオス、カンボジアにおける北ヴェトナム軍のプレゼンス拡大と両国からの南ヴェトナムへの浸透の増大を引き起こしただけでなく、パリ交渉でのハノイの姿勢を硬化させ、さらには、米国民・議会の政権批判を高めて、ニクソン政権に南ヴェトナムからの一方的な撤兵を強いる圧力を作り出したのである。

第2に、71年5月に相互撤退原則を放棄した後、ニクソン政権は南ヴェトナムからの北ヴェトナム軍の撤退を断念し、かわりにラオス、カンボジアからの浸透を停止して残留北ヴェトナム軍を「衰弱」させる戦術に転換をはかった。従来の研究は、北ヴェトナム軍の残留を是認したことに関心を注ぎ、72年10月交渉以降、キッシンジャーがラオス、カンボジアからの浸透停止、両国からの北ヴェトナム軍の撤退を最重要課題のひとつに掲げて交渉に臨んでいたことを十分に指摘していない。多くの研究は73年1月の和平協定の締結をもってヴェトナム和平交渉の終着点としているが、少なくともキッシンジャーにとっては、ラオス和平協定の締結と同国

からの北ヴェトナム軍の撤退が完了するまでヴェトナム和平戦略は完遂されるものではなかったのである。

しかし、第3に、ヴェトナム和平の鍵となったラオス問題に関して、ニクソンとキッシンジャーは自らの目的を達成することはできなかった。そもそも、ラオスからの浸透を遮断して北ヴェトナム軍を衰弱させるという政策が、どれほど現実的であったか疑問である。第1節で見たように、ジョンソン政権期からすでにラオスでは秘密の戦争が行われ、ニクソン政権期になると、ホー・チ・ミン・ルートへの爆撃は熾烈を極めた。それでも、北ヴェトナムによる浸透はいっこうに減退していなかったのである。ましてや、米軍が南ヴェトナムから撤退し、北ヴェトナムにとって、より浸透しやすい環境が出現する中で、それを確実に遮断する術など見つけられなかった。本稿で指摘したように、ティエウもニクソンも、北ヴェトナムが約束どおり浸透を停止してラオスから撤退するなどと考えていなかったのである。

また、キッシンジャーはラオス問題を重視しながらも、従来の方針を曲げてヴェトナム和平とラオス和平を切り離し、秘密の了解によってラオス和平を実現しようとしたが、結果としてこれが致命的な誤りとなった。キッシンジャーは72年10月の交渉で、ヴェトナム和平とラオス和平に時間差を認め、またラオス、カンボジアからの撤退期限を明記しない秘密了解をレ・ドク・トと交わしたのだった。その結果、いったんヴェトナムで和平が成立し、米軍が南ヴェトナムから撤退すると、北ヴェトナム政府はラオスからの撤退を先延ばしして秘密の了解を反古にしていく機会を得ることになったのである。南ヴェトナムから撤退しなかった北ヴェトナム軍を、ラオス、カンボジアから撤退させられると、なぜキッシンジャーが考えたのか不可解である。

最後に、本稿の考察を踏まえると、ニクソンとキッシンジャーが主張するように、彼らが「名

誉ある平和」を成し遂げたとは評価しがたい。本稿の限定的な考察では、キンボールのように、ニクソン政権は1970年末頃に早くも「適当な間隔」による解決に方針を切り替えた<sup>113)</sup>、とは判断できない。ただし、第5節で見たように、ニクソンもキッシンジャーも遅くともヴェトナムと平和協定直後にはそれが機能しないことは認識していたように思える。とくに、平和協定締結から夏にかけて、3度レ・ドク・トと交渉を重ねたキッシンジャーは、約4年の歳月をかけて積み重ねてきた合意事項が北ヴェトナムにほとんど遵守されていないという厳然たる事実と直面していたのである。なかでも、ヴェトナムと平和の鍵を握るラオスに関する秘密了解の不履行は、キッシンジャーの北ヴェトナム不信を増幅させ、彼の和平戦略の根幹を揺るがすものだった。

## 注

- 1) Jeffrey Kimball, *Nixon's Vietnam War* (Lawrence: University Press of Kansas: 1998); Larry Berman, *No Peace, No Honor: Nixon, Kissinger, and Betrayal in Vietnam* (New York: Touchstone, 2002); Pierre Asselin, *A Bitter Peace: Washington, Hanoi, and the Making of the Paris Agreement* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2002); Jussi Hanhimäki, *The Flawed Architect: Henry Kissinger and American Foreign Policy* (New York: Oxford University Press, 2004); Robert Dallek, *Nixon and Kissinger: Partners in Power* (New York: HarperCollins Publishers, 2007).
- 2) 次の研究は、ヴェトナム、ラオス、カンボジアの情勢を網羅した研究として有益であるが、それぞれの情勢の関連性が必ずしも明確にされていない。Arthur J. Dommen, *The Indochinese Experience of the French and the Americans: Nationalism and Communism in Cambodia, Laos, and Vietnam* (Bloomington: Indiana University Press, 2001).
- 3) カンボジアと平和の模索とその挫折については、野口博史「米国のカンボジアと平和構想とその失敗—交渉・政治・紛争、1972-1973年」『アカデミア』(人文・社会科学編) (91) (2010年6月)を参照せよ。
- 4) 戦後歴代アメリカ政府のラオス政策を概観した

研究として、以下の研究が有益である。Charles A. Stevenson, *The End of Nowhere: American Policy toward Laos since 1954* (Boston: Beacon Press, 1972); Timothy N. Castle, *At War in the Shadow of Vietnam: U.S. Military Aid to the Royal Lao Government, 1955-1975* (New York: Columbia University Press, 1993). アイゼンハワー政権のラオス政策については、寺地功次「民主主義、選挙と国内的安全保障—1950年代のラオス選挙とアメリカ」大津留(北川)智恵子・大芝亮編『アメリカが語る民主主義—その普遍性、特異性、相互浸透性』ミネルヴァ書房、2000年、第5章。

- 5) 1960年代初頭のラオス内戦とジュネーヴ会議については、以下の研究を参照せよ。Bernard B. Fall, *Anatomy of a Crisis: The Laotian Crisis of 1960-1961* (New York: Double Day & Company, 1969); Mark Thee, *Notes of a Witness: Laos and the Second Indochinese War* (New York: Random House, 1973); 桜井由躬雄・石澤良昭『東南アジア現代史III—ヴェトナム・カンボジア・ラオス』山川出版社、1995年、第3部第2章、寺地功次「ラオス危機と米英のSEATO軍事介入」日本国際政治学会編『国際政治』第130号(「現代史としてのベトナム戦争」)(2002年5月)、同「ラオス中立化とアメリカ外交」『共立国際研究』第27号(2010年3月)、プーミー・ヴォンヴィチット(平田豊訳)『激動のラオス現代史を生きて—回想のわが生涯』めこん、2010年、第10、11章、水本義彦『同盟の相剋—戦後インドシナ紛争をめぐる英米関係』千倉書房、2009年、第2、3章。
- 6) この点については、Norman B. Hannah, *The Key to Failure: Laos and the Vietnam War* (Lanham: Madison Books, 1987)を参照せよ。
- 7) Martin Stuart-Fox, *A History of Laos* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), p.139.
- 8) リチャード・ニクソン(宮崎緑・宮崎成人共訳)『ノー・モア・ヴェトナム』講談社、1986年、193頁。
- 9) 歴代アメリカ政権とモン族の関係については、以下の研究を参照せよ。Jane Hamilton-Merritt, *Tragic Mountains: The Hmong, the Americans, and the Secret Wars for Laos, 1942-1992* (Bloomington: Indiana University Press, 1993); Roger Warner, *Shooting at the Moon: The Story of America's Clandestine War in Laos* (South Royalton: Steerforth Press, 1996); Keith Quincy, *Harvesting Pa Chay's Wheat: The Hmong & America's Secret War in Laos* (Washington: Eastern Washington University Press, 2000); チア・ユイー・ヴァン「ラオスにおける米国の冷戦政

- 策とモン族」貴志俊彦・土屋由香編『文化冷戦の時代—アメリカとアジア』国際書院、2009年、第10章、松岡完「ベトナム戦争初期における山岳民族部隊」『軍事史学』第45巻第2号（2009年9月）。
- 10) William H. Sullivan, *Obbligato 1939-1979: Notes on a Foreign Service Career* (New York: W. W. Norton & Company, 1984), chapter 7; Maj. Gen. Oudone Sananikone, *The Royal Lao Army and U.S. Army Advice and Support* (Washington D.C.: U.S. Army Center of Military History, 1983), chapter 7; Kenneth Conboy, *The War in Laos 1960-75* (Oxford: Osprey Publishing, 1989), p.22; Sutayut Osornprasop, 'Amid the Heat of the Cold War in Asia: Thailand and the American Secret War in Indochina (1960-1974),' *Cold War History*, 7:3 (August 2007), pp.355-361; William M. Leary, 'CIA Air Operations in Laos, 1955-1974: Supporting the "Secret War,"' [<https://www.cia.gov/library/center-for-the-study-of-intelligence/csi-publications/csi-studies/studies/winter99-00/art7.html>]; ジェームズ・R・リリー（西倉一喜訳）『チャイナハンズ—元駐中米大使の回想1916-1991』草思社、2006年、第8章、ティム・ワイナー（藤田博司・山田侑平・佐藤信行訳）『CIA秘録—その誕生から今日まで（下）』文藝春秋、2008年、第24章。CIAのラオス内戦への介入については、近年解禁された以下のオフィシャル・ヒストリーも参考になる。Thomas L. Ahern, Jr., 'Undercover Armies: CIA and Surrogate Warfare in Laos, 1961-1973,' [[http://www.foia.cia.gov/vietnam/6\\_UNDERCOVER\\_ARMIES.pdf](http://www.foia.cia.gov/vietnam/6_UNDERCOVER_ARMIES.pdf)].
- 11) Leary, 'CIA Air Operations in Laos, 1955-1974.'
- 12) ジョージ・C・ヘリング（秋谷昌平訳）『アメリカの最も長い戦争（下）』講談社、1985年、138、146頁。
- 13) ニクソン政権のカンボジア侵攻の決定過程とその動機については、手賀裕輔「ニクソン政権のカンボジア侵攻決定過程（1970）—信頼性のための侵攻」『法学政治学論究』第85号（2010年6月）を参照せよ。
- 14) Castle, *At War in the Shadow of Vietnam*, p.112; Conboy, *The War in Laos 1960-75*, pp.22-23; Osornprasop, 'Amid the Heat of the Cold War in Asia,' p.366.
- 15) ヘンリー・A・キッシンジャー（岡崎久彦監訳）『外交（下）』日本経済新聞社、1996年、337頁。
- 16) *Foreign Relations of the United States, 1969-1976* (hereafter, *FRUS*), volume VI: Vietnam, January 1969-July 1970 (Washington: United States Government Printing Office, 2006), 'Attachment: Paper Prepared for President Nixon,' undated, pp.159-160; *FRUS, 1969-1976*, VI, 'Talking Points for President Nixon,' March 31, 1969, p.178.
- 17) 'National Security Decision Memorandum 9,' April 1, 1969, Box H-209, National Security Council Institutional Files (hereafter, NSCIF), National Security Council Files (hereafter, NSCF), Nixon Presidential Materials (hereafter, *NPM*), Nixon Presidential Library and Museum, Yorba Linda, CA; *FRUS, 1969-1976*, VI, 'National Security Decision Memorandum 9,' April 1, 1969, p.51. この決定は1969年3月28日の国家安全保障会議での議論に基づく決定である。'Approved Version of "A General Strategy and Plan of Action for Viet-Nam Negotiations,"' April 12, 1969, VW00677, *Digital National Security Archive*, [hereafter, *DNSA*]; *FRUS, 1969-1976*, VI, 'Minutes of National Security Council Meeting,' March 28, 1969, p.173 を参照のこと。
- 18) Nguyen Tien Hung and Jerrold L. Schecter, *The Palace File* (New York: Harper & Row, 1986), p.35; 'Address to the Nation on Vietnam,' May 14, 1969, *The American Presidency Project* [hereafter, APP], [<http://www.presidency.ucsb.edu>].
- 19) Nguyen Phu Duc, *The Viet-Nam Peace Negotiations: Saigon's Side of the Story* (Christiansburg: Dalley Book Service, 2005), p.199.
- 20) 'Richard Nixon and Henry Kissinger Meet with Nguyen Van Thieu,' July 30, 1969, KT00037, *DNSA; FRUS, 1969-1976*, VI, 'Memorandum of Conversation,' July 30, 1969, p.325; Duc, *The Viet-Nam Peace Negotiations*, p.230.
- 21) Dommen, *The Indochinese Experience of the French and the Americans*, p.755.
- 22) H・A・キッシンジャー（桃井眞監修・斎藤彌三郎・小林正文・大舩人一・鈴木康雄訳）『キッシンジャー秘録②激動のインドシナ』小学館、1980年、198頁。
- 23) Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *Le Duc Tho-Kissinger Negotiations in Paris* (Hanoi: The Gioi Publishers, 1996), pp.126-127, 134-6; 'My Meeting with Le Duc Tho and Xuan Thuy, March 16, 1970,' March 16, 1970, KT00108, *DNSA; FRUS, 1969-1976*, VI,

- 'Memorandum of Concersation,' March 16, 1970, pp.675-676.
- 24) *FRUS, 1969-1976*, VI, 'Memorandum from the President's Assistant for National Security Affairs (Kissinger) to President Nixon,' April 6, 1970, p.794.
- 25) *FRUS, 1969-1976*, VI, 'Memorandum of Conversation,' April 4, 1970, pp.781-783.
- 26) サイミントン委員会の活動については、Linda McFarland, *Cold War Strategist: Stuart Symington and the Search for National Security* (Westport: Praeger, 2001), chapter 9-10; James C. Olson, *Stuart Symington: A Life* (Columbia: University of Missouri Press, 2003), chapter 29; Dommen, *The Indochinese Experience of the French and the Americans*, pp.701-704.
- 27) Julian E. Zelizer, 'Congress and the Politics of Troop Withdrawal,' *Diplomatic History*, 34:3 (June 2010), p.537.
- 28) リチャード・ニクソン (松尾文夫・斎田一路訳) 『ニクソン回顧録①栄光の日々』小学館、1978年、207頁; Berman, *No Peace, No Honor*, p.80.
- 29) 'Address to the Nation about a New Initiative for Peace in Southeast Asia,' October 7, 1970, *APP*.
- 30) Kimball, *Nixon's Vietnam War*, pp.235-236.
- 31) Duc, *The Viet-Nam Peace Negotiations*, p.251; 'The Impact of [Illegible],' March 9, 1971, VW00253, *DNSA*; 'Meeting in the President's Office with Souvanna Phouma, Prime Minister of Laos (11:05-11:45 a.m.),' October 21, 1970, VW00213, *DNSA*; Sananikone, *The Royal Lao Army and U.S. Army Advice and Support*, p.142
- 32) Alexander M. Haig, Jr. with Charles McCarry, *Inner Circles: How America Changed the World: A Memoir* (New York: Warner Books, 1992), p.273.
- 33) Haig, *Inner Circles*, p.278; Lien-Hang T. Nguyen, 'Waging War on All Fronts: Nixon, Kissinger, and the Vietnam War, 1969-1972' in Frederik Logevall and Andrew Preston (eds.), *Nixon in the World: American Foreign Relations, 1969-1977* (New York: Oxford University Press, 2008), pp.195-196.
- 34) 'Second Annual Report to the Congress on United States Foreign Policy,' February 25, 1971, *APP*; 'The President's News Conference on Foreign Policy,' March 4, 1971, *APP*.
- 35) ニクソン『ニクソン回顧録①栄光の日々』、247頁。
- 36) ドン・オーバードファー (菱木一美・長賀一哉訳) 『マイク・マンズフィールドー米国の良心を守った政治家の生涯 (下)』共同通信社、2005年、182-183頁、Lien-Hang T. Nguyen, 'Waging War on All Fronts,' pp.196-197.
- 37) H. R. Haldeman, *The Haldeman Diaries: Inside the Nixon White House* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1994), p.261.
- 38) Asselin, *A Bitter Peace*, p.28; 手賀裕輔「ニクソン政権のベトナム政策と対中接近一軍事的二極と政治的多極の相剋、1970-1971」『国際安全保障』第38巻第1号 (2010年6月)、11頁。
- 39) Howard B. Schaffer, *Ellsworth Bunker: Global Troubleshooter, Vietnam Hawk* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2003), p.236; H・A・キッシンジャー (桃井眞監修・斎藤彌三郎・小林正文・大舩人一・鈴木康雄訳) 『キッシンジャー秘録④モスクワ会談への道』、小学館、1980年、129-130頁; Kimball, *Nixon's Vietnam War*, p.265.
- 40) キッシンジャー『キッシンジャー秘録④モスクワ会談への道』、129-130頁。
- 41) この演説の内容については、'Address to the Nation Making Public a Plan for Peace in Vietnam,' January 25, 1972, *APP*.
- 42) ただし、近年の研究によれば、ニクソン、キッシンジャーが期待したほど、中国とソ連が北ヴェトナムに圧力をかけることはなかった。両国ともアメリカとの関係改善を求める一方で、中ソ対立の観点から北ヴェトナムとの関係維持を重視し、ハノイの指導部に圧力を行使してアメリカとの交渉妥協を強いることは控えていた。Jussi Hanhimaki, 'Selling the "Decent Interval": Kissinger, Triangular Diplomacy, and the End of the Vietnam War, 1971-73,' *Diplomacy & Statecraft*, 14:1 (March 2003); Lorenz M. Luthi, 'Beyond Betrayal: Beijing, Moscow, and the Paris Negotiations, 1971-1973,' *Journal of Cold War Studies*, 11:1 (Winter 2009).
- 43) Ang Cheng Guan, *Ending the Vietnam War: The Vietnamese Communists' Perspective* (London: Routledge Curzon, 2004), p.7, 102.
- 44) H・A・キッシンジャー (桃井眞監修・斎藤彌三郎・小林正文・大舩人一・鈴木康雄訳) 『キッシンジャー秘録⑤パリ会談の成功』、小学館、1980年、183頁。
- 45) Asselin, *A Bitter Peace*, p.74; *FRUS, 1969-1976*, vol.VIII, (Washington: United States Government Printing Office, 2010), 'Memorandum from the President's Assistant for National Security Affairs

- (Kissinger) to President Nixon,' September 28, 1972, p.985.
- 46) 'Henry Kissinger's Meeting with Le Duc Tho and Xuan Thuy: Includes Attachments: Page 50 Missing,' September 26, 1972, VW01010, *DNSA*.
- 47) キッシンジャー『キッシンジャー秘録⑤パリ会談の成功』、196頁。引用部分の漢数字を算用数字に変更した。
- 48) 'U.S. and North Vietnamese Draft Agreements: Includes Attachments,' October 8, 1972, KT00580, *DNSA*; Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *Le Duc Tho-Kissinger Negotiations in Paris*, p.309, 311-312, 317.
- 49) 'Vietnam Peace Negotiations: Includes Draft Agreement and Related Documents,' October 10, 1972, KT00582, *DNSA*.
- 50) 野口博史「ベトナム戦争とカンボジア」日本国際政治学会編『国際政治』第130号（「現代史としてのベトナム戦争」）（2002年5月）、136-137頁、同「米国のカンボジア和平構想とその失敗」、378頁。
- 51) 'Vietnam Peace Negotiations: Includes Draft Agreement and Supporting Documents,' October 11, 1972, KT00583, *DNSA*; Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *Le Duc Tho-Kissinger Negotiations in Paris*, pp.327-329.
- 52) 'Vietnam Peace Negotiations: Includes Draft Agreement and Supporting Documents,' October 11, 1972, KT00583, *DNSA*.
- 53) スネップは次のように批判している。「キッシンジャーは（中略）ラオスとカンボジアを扱った規定の言葉づかいについても失敗した。不可解なことだが、彼は協定文のなかにこれら両国からの北ベトナム軍撤退の期限を含めるのを忘ったのである。」フランク・スネップ（仲晃監訳）『CIAの戦争—ベトナム大敗走の軌跡（上）』パシフィカ、1978年、77頁。
- 54) ウォルター・アイザックソン（別宮貞徳監訳）『キッシンジャー—世界をデザインした男（下）』NHK出版、1994年、73-75頁、Kimball, *Nixon's Vietnam War*, p.343; Hanhimaki, *The Flawed Architect*, p.240; Dallek, *Nixon and Kissinger*, p.407, 414-415, 418, 421, 425; Richard Reeves, *President Nixon: Alone in the White House* (New York: Simon & Schuster, 2001), chapter 35; Haig to Kissinger, October 20, 1972, Box 104, Henry Kissinger Office Files, NSCF, *NPM*.
- 55) アイザックソン『キッシンジャー（下）』、89-90頁; Schaffer, *Ellsworth Bunker*, p.249.
- 56) Haig, *Inner Circles*, p.300.
- 57) Hung and Schecter, *The Palace File*, p.110.
- 58) アイザックソン『キッシンジャー（下）』、99頁。
- 59) Hung and Schecter, *The Palace File*, pp.104-105.
- 60) Allan E. Goodman, *The Lost Peace: America's Search for a Negotiated Settlement of the Vietnam War* (Stanford: Hoover Institution Press, 1978), p.133.
- 61) Thieu to Nixon, November 11, 1972, Box 766, Presidential Correspondence 1969-1974, NSCF, *NPM*.
- 62) Asselin, *A Bitter Peace*, p.91.
- 63) 'Chronology of the Viet-Nam Conflict,' February 1973, VW01226, *DNSA*; Nguyen Phu Duc, *The Viet-Nam Peace Negotiations*, pp.334-335.
- 64) 'The President's meeting with Laotian Prime Minister Souvanna Phouma, Dr. Kissinger, Ambassador William Sullivan, and Ambassador Prince Khammao on Friday, October 27, 1972 at 3.47 to 4.44 p.m. -The Oval Office,' Box 1022, Alexander M. Haig Special Files, NSCF, *NPM*; 'Memorandum of conversation,' October 19, 1972, Box 1022, Alexander M. Haig Special Files, NSCF, *NPM*; 'Views of Laotian Government on the proposed agreement,' undated, Box 1022, Alexander M. Haig Special Files, NSCF, *NPM*; 'Views of Laotian Government on the proposed agreement,' January 13, 1973, Box 1022, Alexander M. Haig Special Files, NSCF, *NPM*.
- 65) ニクソンのティエウ宛のメッセージは以下に所収されている。Box 105, Henry A. Kissinger Office Files, NSCF, *NPM*.
- 66) Hung and Schecter, *The Palace File*, p.115, 121-122, 124-125; Nixon to Thieu, November 14, 1972, Box 105, Henry Kissinger Files, NSCF, *NPM*.
- 67) Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *Le Duc Tho-Kissinger Negotiations in Paris*, p.361; Ang Cheng Guan, *Ending the Vietnam War*, p.116; Goodman, *The Lost Peace*, p.153.
- 68) 'Continued Discussion of Vietnam Peace Agreement with Le Duc Tho and Xuan Thuy: Includes Draft Article on Reunification of Vietnam,' November 23, 1972, KT00606, *DNSA*; Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *Le Duc Tho-Kissinger Negotiations in Paris*, pp.374-377; Asselin, *A Bitter Peace*, p.117.
- 69) 'Meeting with Le Duc Tho and Xuan Thuy: Includes Attachments,' December 7, 1972, KT00630, *DNSA*; 'Meeting with Le Duc Tho and Xuan Thuy: Includes Attachments,'



- KT00640, DNSA; 'Henry Kissinger's Meeting with Le Duc Tho,' December 14, 1972, VW01150, DNSA.
- 70) 'Understandings Associated with the Agreement,' January 11, 1973, VW01205, DNSA; Luu Van Loi and Nguyen Anh Vu, *Le Duc Tho-Kissinger Negotiations in Paris*, pp.431-432, 556; Asselin, *A Bitter Peace*, p.161.
- 71) 'Address to the Nation Announcing Conclusion of an Agreement on Ending the War and Restoring Peace in Vietnam,' January 23, 1973, APP.
- 72) Kimball, *Nixon's Vietnam War*, p.370; Jeffrey Kimball, 'The Case of the "Decent Interval": Do We Now Have a Smoking Gun?,' *SHAFR: September 2001 Newsletter* [<http://www.shafr.org/newsletter/2001/sep/interval.htm>]. ハニマキは、ラムソン719の失敗以後、ニクソン政権が望みうる最大限のものが、「適当な間隔」によるヴェトナム問題の解決であり、それを実現する手段として中国・ソ連との三角外交を展開したと主張している。Hanhimaki, 'Selling the "Decent Interval,"' p.166. 次の文献も参照せよ。Ken Hughes, 'Fatal Politics: Nixon's Political Timetable for withdrawing from Vietnam,' *Diplomatic History*, 34:3 (June 2010).
- 73) アイザックソン『キッシンジャー(下)』、146頁。ヘリングは、キッシンジャーの主な関心はヴェトナムから抜け出すことにあつたため「適当な間隔」による解決で満足していたのに対し、ニクソンはあくまで名誉ある平和を追求していたとして、両者の違いを指摘している。ヘリング『アメリカの最も長い戦争(下)』、161頁。
- 74) Berman, *No Peace, No Honor*, p.9.
- 75) Asselin, *A Bitter Peace*, pp.xi-xiii.
- 76) Haig, *Inner Circles*, p.310; Hung and Schecter, *The Palace File*, pp.140-141.
- 77) 'Alexander Haig's Meeting with President Thieu,' December 19, 1972, VW01166, DNSA; Thieu to Nixon, 26 November 1972, Box 766, Presidential Correspondence 1969-1974, NSCF, NPM. Thieu to Nixon, December 20, 1972, Box 104, Henry Kissinger Office Files, NSCF, NPM.
- 78) Kissinger to Bunker, January 17, 1973, Box 104, Henry Kissinger Office Files, NSCF, NPM. ニクソンのティエウへの圧力については、Hung and Schecter, *The Palace File*, p.140,143-144, 148-150.
- 79) 'Alexander Haig's Meeting with President Thieu,' December 19, 1972, VW01166, DNSA.
- 80) Dallek, *Nixon and Kissinger*, p.454.
- 81) 'Alexander Haig's Meeting with President Thieu,' December 19, 1972, VW01166, DNSA.
- 82) ニクソン『ノー・モア・ヴェトナム』、236-237頁。
- 83) ニクソン『ノー・モア・ヴェトナム』、246頁。引用部分の漢数字を算用数字に変更した。
- 84) H・A・キッシンジャー(読売新聞・調査研究本部訳・桃井真監修)『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』小学館、1982年、35、49頁。
- 85) 'Talking points for your meetings with President Thieu,' Kissinger to Nixon, March 31, 1973, Box 105, Henry Kissinger Office Files, NSCF, NPM.
- 86) キッシンジャーは、ハノイを訪問する前日の2月9日、ヴィエンチャンを訪問し、プーマと会談した。その際、ドーメンによれば、プーマは、軍事問題(停戦問題)と政治問題の切り離しを求めるアメリカの圧力に抵抗していたという。プーマは、政治問題を解決する前に停戦を実施すると、ラオスの軍事的分断が固定化し、国家が分裂することを恐れていたのだった。Dommen, *The Indochinese Experience of the French and the Americans*, p.837.
- 87) 2月11日の交渉記録については、'Discussion with Pham Van Dong and Le Duc Tho in Hanoi: Includes Documents Entitled "Modalities of Implementation Article 20 (b)" and "Normalization of U.S.-DRV Relations,"' February 11, 1973, KT00667, DNSA. 12日の記録については、'Discussion of Laos and Cambodia with Le Duc Tho,' February 12, 1973, KT00668, DNSA. また、この交渉については以下の文献も参照せよ。キッシンジャー『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』、51-54頁。ラオス王国軍のある高官の回想によれば、アメリカ政府は大使館を通じてプーマ政府に、パテト・ラオとの早期の平和協定の締結を求めて圧力をかけてきた。在ラオス米大使館は、暗に援助の停止をも含んだ脅しを行い、プーマ政府はパテト・ラオへの譲歩を強いられたという。Sananikone, *The Royal Lao Army and U.S. Army Advice and Support*, pp.147-150.
- 88) 'Laos Agreement,' February 21, 1973, VW01231, DNSA; Dommen, *The Indochinese Experience of the French and the Americans*, pp.841-842.
- 89) Hung and Schecter, *The Palace File*, p.186.
- 90) 'Trip to Southeast Asia,' April 11, 1973, VW01240, DNSA.

- 91) キッシンジャー『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』、376頁。
- 92) 'Memorandum of conversation,' December 6, 1972, Box 104, Henry Kissinger Office Files, NSCF, *NPM*.
- 93) Hung and Schecter, *The Palace File*, pp.168-169.
- 94) キッシンジャー『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』、391頁。
- 95) Haldeman, *The Haldeman Diaries*, p.590.
- 96) キッシンジャー『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』、395頁。
- 97) 'Possible Options for enforcing the agreement,' Kissinger to Nixon, April 16, 1973, Box H-091, NSCIF, NSCF, *NPM*.
- 98) キッシンジャー『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』、394-404頁。
- 99) ニクソン『ノー・モア・ヴェトナム』、250頁。
- 100) Dallek, *Nixon and Kissinger*, p.469, 472.
- 101) キッシンジャー『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』、402頁。
- 102) ニクソン『ノー・モア・ヴェトナム』、250頁。引用部分の漢数字を算用数字に変更した。
- 103) 例えばニクソンは、自分が成し遂げた名誉ある平和が議会によって破綻させられたと、次のように主張する。「ヴェトナムで、我々は戦争に勝ったが、平和を失った。20年にわたる戦闘で我々が成し遂げたものは、すべて、議会の発作的な無責任さのもとで無に帰してしまったのである」。ニクソン『ノー・モア・ヴェトナム』、233頁。引用部分の漢数字を算用数字に変更した。「12年以上にわたる犠牲と戦闘というきわめて大きな代償を払って、アメリカはインドシナにおける戦争に勝ち、平和を実現した。しかし、それは、議会がわれわれの義務を遂行するのを拒否したあと、数カ月のうちに失われてしまった。この悲劇的な結果に対して、責任を負わなければならないのは議会である」。リチャード・ニクソン(松尾文夫・斎田一路訳)『ニクソン回顧録③破局への道』小学館、1979年、26頁。引用部分の漢数字を算用数字に変更した。
- 104) 'Communist violations of the cease-fire agreement,' William L. Sterman to Kissinger, May 12, 1973, Box 114, Henry Kissinger Office Files, NSCF, *NPM*.
- 105) 'Negotiation of Joint Communiqué with Le Duc Tho: Includes Proposals on Laos and Cambodia,' June 6, 1973, KT00746, *DNSA*.
- 106) 'Indochina: Understandings as Agreed June 13, 1973,' Box 110, Henry Kissinger Office Files, NSCF, *NPM*. 'Conclusion of Joint Communiqué Negotiations with Le Duc Tho: Includes Attachment,' June 13, 1973, KT00753, *DNSA*. キッシンジャーとレ・ドク・トは会谈の成果を共同宣言として発表し、ヴェトナム和平協定の厳格な履行を宣言した。この共同声明では、和平協定の各条文について今後履行すべき問題点を列挙しているが、第20条については、同条約を実直に履行すると謳われただけであり、本段落で見た政治諮問評議会や外国軍の撤退期限については公表されなかった。
- 107) 'Negotiation of Joint Communiqué with Le Duc Tho: Includes Draft Understanding on Cambodia,' June 7, 1973, KT00747, *DNSA*.
- 108) Dommen, *Laos*, pp.96-97;
- 109) 桜井・石澤『東南アジア現代史Ⅲーヴェトナム・カンボジア・ラオス』、419頁。
- 100) キッシンジャー『キッシンジャー激動の時代①ブレジネフと毛沢東』、417頁、Osornprasop, 'Amid the Heat of the Cold War in Asia,' p.366.
- 111) 'Meeting of Henry Kissinger and South Vietnamese Government Officials in New York City,' September 26, 1973, VW01247, *DNSA*.
- 112) John Prados, *The Blood Road: The Ho Chi Minh Trail and the Vietnam War* (New York: John Wiley & Sons, 1998), p.372.
- 113) Kimball, *Nixon's Vietnam War*, p.240; Kimball, 'The Case of the "Decent Interval"'.